
異界嫁日記

成田のべる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界嫁日記

【Nコード】

N0162W

【作者名】

成田のべる

【あらすじ】

地球と異世界をつなぐゲートから帰還した「おれ」。

ワケあり勇者として召喚された高校生のおれは、とあるチートな秘策を駆使して、ゲート内世界を救おうとしたのだが。

その過程で出会ったゲート内世界のお姫様たちや魔剣士、はたまた地球に帰ってきてからは義妹や女教師が熱いまなざしをおれに向けてきて、さあ大変。

やがてゲートによって二つの世界が恒常的につながったことで、おれの女性関係はさらなる混乱の度を深めてゆくのだった。

VRMMOゲーム的な異世界と現実を行ったり来たりのラブコメ
デイ!

注意：R15相当のレーティング。

プロローグ

（イレブンズゲート）

世界各国に異世界と通じる扉が開いたのは3ヶ月前のこと。

アメリカ、イギリス、中国など11の国に、野球場ほどの面積を有する超次元空間が生まれた。

ここ日本にもゲートがある。東京都武蔵野市、都立吉上高校の校庭が丸ごと大ゲートへ空間転移し、もともとあったグラウンドは次元の彼方に吹き飛ばされてしまった。

それはそれは、世界中が大変な騒ぎになったそうだ。

もっとも、その時の様子をおれはこちら側の世界から見ていない。各国の軍隊や警察が厳戒態勢を敷き、マスコミ報道もそのこと一色でテレビも通常番組の放送を休止した。いまも報道番組のなかで、検証番組が繰り返し放送されているのを、おれは自宅にもどってかちゅうくりテレビで見せてもらったのだが。

世界中の関心は11ヶ所のゲートに向けられ、その間は紛争中の国家や民族同士も停戦せざるを得なかったほど。人類未曾有の事態は、宇宙人の侵略か、はたまた天変地異の前触れかと世界中の人間を震え上がらせた。

数日が経ち、各ゲートから人間が姿を見せると、その身柄はたちまち各国政府の保護下に置かれた。

11ヶ所のゲートから一人づつの人間が現れたのだが、日本のゲートから出てきたのが、この「おれ」だったというわけだ。

おれの名前は、双葉^{ふたば}としあき。一年前に行方不明となり、両親を苦しめた親不孝者だ。ゲートがおれの通う学校の敷地に現れたのは、異世界での役割を終えて故郷に帰る者たちのために、神さまがそれぞれの家路に近い場所を選んでくれたからである。

第一章 リリーナ・フォーミュラ・エル・スターバックス姫

ゲート内は11大国家が陸と海洋の9割近くを支配するが、どの国にも属さない小国も数多くある。その領地を合わせて、やっと大国家1つ分ほどの自治区を形作っていた。

もともとおれを召還したのは、く龍神を王とする鱗持つ民の国くミズマミシマだったのだが、龍神の代弁者である祀族長オトヒメが年若い少女であったためか、未熟な術式の結果、被召還者の身体はミズマミシマと関わりのない小国、スターバックスに現出した。

スターバックスは人口30万人ほどの国というよりは、われわれ現代人の感覚で言うところの「市」に近い。貴族制度は無く、王家とその縁戚者と代議士、官僚が統治するミニ行政区だった。

スターバックスに美貌の皇女あり。リリーナ姫。正しくはリリーナ・フォーミュラ・エル・スターバックス芳紀16歳の愛称が、リリーナ姫。

その可憐な姿を思い出すと、授業中の教室であるにもかかわらず顔がにやけてしまう。

その夜、平凡な高校生であるおれの前で、高貴な美姫はその柔肌を無防備にさらした。薄衣の夜着が月明かりに照らされ、下着もつけていないためにその肢体が、ほぼ全裸同然におれの目に焼き付く。

おもわず、おれはつばを飲んだ。

この時点でおれは女性経験が無かったので、初体験が異国の姫君

相手とあつては気圧されずにいられない。

リイナ姫と出会つてこのとき3ヶ月。幾度か彼女の窮地を救い、信頼を勝ち得ていたおれが彼女と親しくあることを周囲の者もとがめはしなくなつた頃だった。

「ひ、姫、ほ、本当にいいのですか」

リイナ姫がうなずく。恥ずかしいのだろう。顔を伏せてこちらを見ようとしない。

その日、く不死者たちの終わりなき遊技場と呼ばれる死霊貴族領スラヴィアの、死神モルテの力によつて生み出された死なずの者達、またの名をアンデッド軍団の侵攻を食い止め、あまつさえ不死の軍隊に完全な死を与えたおれは、スターバックスのみならず隣国領の住人たちからも英雄として崇められるようになった。

騎士団とともに凱旋したおれは道中、村人たちから熱烈な歓迎を受けつつ、スターバックス王都マキアートまで帰還した。沿道からは騎士団の先頭を進む馬上のおれに向かって、花束と歓声が浴びせられた。

宮城の前では王自らが妃と皇女を従えて、おれを出迎えてくれた。小国の善君で気さくなお方であるスターバックス王であっても、これは格別の労いだ。

おれは民衆の前で王に肩を抱かれ、王と並び立つとまるで公国の王子でもあるかのような賞賛を浴びた。

侍従が盛大な宴を催すとおれに伝えたが、固辞した。戦はこれで

終わったわけではない。すぐに軍議を開くためと言って、日頃より豪勢な食事を兵たちに与えるよう頼んだ。

本当は、敵軍を完膚なきまでに叩きのめし、国境にも警備の騎士団を置いてきたのでしばらくのんびりできるとわかっていたのだが、おれはこういふときどう振る舞えば自分の評価が高くなるかわかっていた。

おれの根城は、宮城から少し離れた区画の離宮をあてがわれていた。軍議など開かず、部下たちは町へ繰り出していった。酒場へ行ったか、女を漁りに行ったか。

給仕たちに口止めし、おれは食事をした後、果実酒をさらに果汁で割ったグラスを手にバルコニーで夜風に当たっていた。

コンコン。櫛の木の戸を拳でノックする音に振り返る。

2

「入れ」

顔を出したのは見慣れた女官。この人がいるということは……

おれは膝を床につき、胸に手を当てた。

部屋に入ってきたのは、ローブで顔を隠したリリーナ・フォーミ
ユラ・エル・スターバックス皇女。

「階下で待て」

人払いをすると、彼女は顔を見せた。

「面を上げよ」

年若くとも威厳のある声に恐縮して顔を上げると、そこにいたのは一人の少女にすぎなかった。

「としあき卿、よく無事でもどってくれました」

「リイナ姫、だれもいませんから、トッシーでいいですよ」

「トッシー」

サファイヤブルーの宝石をはめたような瞳に涙がたまる。おれはすかさず彼女の脇に経ち肩に手を置く。

「わたしは皇女失格です」

「なにを馬鹿なことを。道中、騎士はみな姫様のこととて話に花を咲かせておりましたよ」

騎士だけでなく、転戦先の村人も親しく会話をするようになると、必ずリイナ姫のことを聞かれる。評判のような美姫なのかと、なにか言葉を賜うことはないのかと。

「領民を守るために戦地へ赴いた騎士団が勝利したことを喜ばなければいけないのに、わたしはあなたが無事に生きて帰ってきてくれたことだけに心を震わせているただの女です。これでは王家の一員として失格です」

「リイナ姫、おれはあなたにそう想われていることを心の糧に戦っております」

「トツシー！」

おれの胸にリイナ姫が飛び込んでくる。姫はこれまでも人目を忍んでは、たびたびおれを訪ねてきてくれた。そろそろ頃合いだろうか。

「武功を立てても、報賞も断り続けるなど、トツシーの振る舞いにわたしも父王も心苦しく想っております」

現代社会で生きてきたおれは、こういつときのように振る舞えば民衆と上官の歡心を買えるか知っている。歴史と政治から学んだ。

そして、こういつときは夜景を見ながら話をするに限る。

「姫、テラスへ」

窓を開けると町の喧噪が伝わってくる。いつもより騒がしいのは、戦勝ムードに湧いているからか。11大国家よりも小国の連合国の方が国民の暮らしは豊かなようだ。

リイナ姫の肩を抱きながら、耳元で囁くような話し方が許される程度の親密さにはすでになれている。

「姫、寒くはありませんか」

まだ秋になっただばかりで肌寒いなどということはないが、一応尋ねてみた。

リイナ姫の身長は160センチもないだろう。彼女が前髪がおれの鎖骨をくすぐる。

一度、彼女の体が離れてベランダに手を置く。

「トッシー、宴席も辞退し報賞も受け取らぬばかりでは、我ら王族の面子も立ちませぬ」

「よいのです。よいのですよ、リイナ姫。おれは民が無事に笑って暮らしていれば、それがおれにとっての勲章なのです。そしてひいては、リイナ姫をお守りすることにつながるのです」

少し強い風が吹いた。他の国の姫様はたいてい髪を腰まで長く伸ばしていることが多いが、リイナ姫の髪型は光沢のある銀髪を肩で切りそろえている。先程述べたようにサファイヤブルーの瞳から風

に乗って、しずくが宙に舞った。

「トツシー、それでもわたしはあなたに褒美を与えたいのだ。なんでもよいから申しておくれ」

「言えません」

「なぜだ」

リイナ姫が胸元で拳を握る。

「口にするのも、あまりにおそれおおいので」

「よい。申しておくれ。遠慮はいらぬ」

「とても、とても申せませぬ」

おれは顔を覆うふりして、指の隙間から姫の表情を伺った。姫の容貌は日本人から見ると、西洋人を通り越してももうハーフエルフかと見まごう神秘的な姿だった。

姫はハラハラした様子でおれに願いを言えと迫るが、これがまたなんと外見に似合わぬコミカルさで可愛らしい。

彼女はおれがなにか苦悩を抱えて、苦悶の表情を隠しているのだと思っっているが、逆だった。おれの顔はデレデレでとても見せられたものではないのだ。

「リイナ姫、願いを申したら聞き入れてもらえますか？」

「もちろんだ」

「本当ですか？」

「皇女に二言はない」

「もしかしたら姫を怒らせるかもしれないよ？」

「かまわぬ。申してみよ」

「では……」

おもむろにおれは、リイナ姫の背中まで両手を回し、その身体を捉えた。

「！ としあき卿、なにを？」

「姫、褒美をいただけるのならわたしは望みは姫ご自身です」

リイナ姫は言葉もない。ただ吐息が漏れた。おれの胸板が彼女の身体に密着する。一条の稻妻がリイナの身体を駆け抜けていった。ビクンと肩がはいれんしたかと思うと、がくつと力が抜けて、まるで操り糸の切れた人形のように、おれの腕の中で動けなくなっていた。

炎のような期待感がおれのなかで燃え上がる。

皇女を想いのままにもてあそんでいるかのように見えるだろうが、このときおれはまだ女性経験がない。

おれはおれなりに使命感を持って生きているつもりだが、彼女に
はじめて会ったときからこの日が来るのを待ちわびていなかったか
といえは嘘になる。

「姫、はじめてお目にかかったときから、おれは、おれはもう！」

この世界で根無し草のおれは、周囲の信頼を得るべく紳士的に振
舞ってきたが、もはや限界だ。

おれは鼻息荒く姫の唇を奪おうとする。

「ヒイツ！」

おれの豹変に姫の顔色が変わった。

「ち、ちょっととしあき卿、ま、待って」

おれが唇を突き出して、姫のそれをふさごうとするのを彼女は細
い腕でおれの顔を押しつけようとする。これはちょっと意外だった。
ここへ来たときには、もう完全に覚悟を決められているのだと半ば
感じていたのだが。

「い、いやですか、姫様？」

「え、そういうわけでは」

「じゃあ、続きを」

「ま、待って、まだ心の準備が」

「皇女に一言はないと言ったじゃないですかー、やだー」

唇に姫の指の感触。

「1分！ わたしに1分時間をくださいー！」

両の掌で必死にガードしながら、思い切りのけぞっておれの顔をか
わす。おれが手を離すと、彼女はバルコニーに手を置いて深く呼
吸した。

「……」

呼吸を整えたリイナ姫は、振り返ってその両腕を広げた。

「さあ、どうぞ。トッシー卿、遠慮なく」

おれはその腰に手を回すが彼女は緊張しているのか、ぎゅっと目を閉じてあごを上に向けている。

彼女の顔におれの息がかかって、皇女の肩がびくと動いた。

(今度こそ、今度こそ！)

もう二人を遮るものはない。身分の差もこれだけ武勲を立てれば、障害にならぬであろう。

(やわらかい、そしてつややかな、さすが王族の唇)

逆に自分の肌のささくれを感じさせるほどの、なめらかな感覚がおれの唇に返ってきた。

リイナ姫の唇は小さく、強く押し付ければおれの口に飲み込まれしまいそうな薄さ。

ぎゅっと、姫の手がおれの肩の衣を掴む。おれは彼女の身体を締め上げぬよう、腰に回した手に力を入れないように気をつけた。

1分近くそうしていたが、姫が窒息してしまいそうなので一度離れる。

「ぶっ、はあ」

苦しそつに息を吐き出す彼女。もたれるように頬を俺の胸の埋めた。

「トツシー、わたしは、わたしは少し怖い。このようなこと、初めてなのだ」

これから起きることを思うと、彼女が怖じ気づくのは仕方ない。不死者の暴徒に御者を囲まれたときも気丈に振る舞っていた皇女だが、それでもはじめての性体験の前には、だれしも恐ろしさに身がすくむものだ。

逆に「オツケー、トツシー。わたしは経験豊富だからバッチコイだ」と言われては堪らない。

「リイナ姫、わたしは謀反人でしょうか。あまりにも畏れ多いことをしていることは重々承知しています……ですが」

「と、としあき殿！ 手、手が！！」

「え？？」

掌にやわらかい感触。女性としてはかなりスレンダーなタイプに属する姫だから、けっしてたわわな感触とはいかないが、貧乳であれ、やはりおっぱいの感触は最高だ。

「うおー、こ、これは失礼を！！」

かしまった口調とは裏腹におれの掌はリイナ姫の右の乳房を包んでいた。右腕はおれの意思に反してその場所から離れようとしな

い。仕方なく左手でその手を引き離した。

彼女は身体を折っていまにも泣き出しそうだ。おれはじっと手を見る。青林檎のようなまだ硬い発展途上の乳房。声なき抗議をするかのような潤んだ瞳。

バルコニーに並んで夜景を眺めた、さきほど抱擁する前に見つめた瞳も、ロマンティックに濡れた双眸だったが、いまのそれはもういかにも「わたし、もうこれがイッパイイッパイなの」という心持ちを現していた。

そしておれの頭の中もまた、おっぱいのことでおっパイオっパイ……もといッパイイッパイなのだった。

「グス……」

姫が涙をぬぐって向き直る。

「リイナ……」

「夜着にかえて参ります」

おれは窓を閉め、部屋の灯りを消した。姫は隣の部屋へと消える。もともとは王族の離宮で彼女の着替えも揃っていた。

（姫、無理をしているなー）

おれもブーツを脱いで、軍服のトラウザーズとシャツをたたんだ。士官からバカにされるが、シャツの下にはもう一枚下着を着る習慣を変えていない。

ベッドの上で正座のままシャツを折っているおれの背後から声がした。

「としあき卿」

(キ、キタ

(。 。)

!!!!!!)

「リリーナ・フォーミュラ殿下、とてもキレイだ」

もじもじと身体をくねらせながら、カーテンの陰に隠れようとする姫におれは近づいた。

手を引くと、まるで体重のない精霊の手を引いているように身が軽い。

カーテンから離れて、月明かりが差し込む窓辺にそのシルエットを照らす。絹のネグリジエに包まれた白い肌が宝石のように神々しい輝きを放っている。

「姫、手を下ろして」

おれに命じられるまま、ふるふるとブラジャーに隠されていない乳房から手をどける。

お椀ほどもない、砂丘のようななだらかなふくらみだったが、初体験のおれには、むしろ似つかわしいだろう。なんとか不安のないように姫をリードしてさしあげたい。

おれの目線の方が高いので、こうして向き合っていると捕虜を処分しているような気まずさがただよってしまふ。

「リイナ、こちらへ」

ほっそりとした肩を抱いてベッドに導くと彼女は、するりとシーツの中に身を隠した。

「明かりを、もそつと暗く……」

おれはカーテンを閉めた。電灯もないから、部屋は月明かりが数条差し込むだけで青暗の闇に包まれた。

おれは目がいい方なので、すぐに闇のなかでも視野がもどる。

「姫、隣へ入りますよ」

「……参れ」

おれは吹き出しそうになる。皇女からすれば、男女の和合も武人にとっての初戦のようなものなのかもしれない。

（おっと）

声が漏れないように唇を閉じ、彼女の隣に侵入する。

「不思議な……気持ちです」

彼女の言いたいことはなんとなくわかる。

「いままで人目を忍んでお逢いしていましたが、とうとう一線を越えることになりましたね」

異界の迷い人だったおれの水先案内役を引き受けてくれたリリーナ。貴族でもない、どこの馬の骨ともわからぬおれと親しく接してくれた。

「あなたとは良き友人になりたいと思っていました。なのに、逢うたびにそれ以上の感情がわたしのなかで育っていくのです」

「おれは友だちでありつづけたと思ったことは一度もありません」

「え？」

悲しそうな顔で姫が振り返る。

「ずっと友だちなんて嫌です。姫が時おり陣中見舞いに来てくれたときも常にわたしは、どうやったらあなたの心を自分のものにできるか考えていました」

おれは姫の身体に体重をかけぬよう手とひざについて、彼女にまがった。シーツは上等なもので、つるつとした感触でおれの背中を滑り落ちていく。

「夜着を脱がさせていただきます」

ビリッ。(あっ、いっけね)彼女のネグリジエを破いてしまった。

(ええい、かまうもんか)おれは自分の肌着を脱ぎ捨てベッドの外に放る。

こうして一糸まとわぬ男女の裸身だけが闇のなかに現れた。

姫は唇を噛んで恥ずかしさに耐えているようだ。右の腕で胸元を隠しているが、左手は観念したように投げ出されている。

その手がおれの頬に触れ、それから首筋を這い胸元に触れる。

「意外と柔らかかな肌なのね。もつとささくれた感触かと思っ
ていました」

現代人の生活に慣れた俺の肌は、この地方の人間ほど荒れてい
ない。それでも辺境での戦を繰り返して日と乾燥に焼かれた方だが。

「そばで肌を見るのは二度目」

城内でおれが半裸で稽古しているところへ、姫がやって来たこ
とがある。

彼女は俺の身体を見て驚いていた。

「傷を受けたあとがまったくないな。そなたのような強者は、不
覚をとったことがまるでないのか？」

おれは、傷が治りやすい体質なのだと答えた。常人なら医師に縫
合を頼むような負傷でも、一晩も経たずに跡形もなく治ってしまう
のだ。

おれの下で仰向けになっている乳房はもとから小ぶりなので、重
力の方向が変わっても形の変わることがない。

もつ無言で、ゆっくりとだが遠慮もなくそのふくらみに手をかけ
た。

「あっ！……あっ」

リイナ姫の声もか細くなっていく。

こういうときどんな順番で女性を喜ばせたらいいのか、おれにはわからないが、今夜この瞬間はリリーナ皇女がおれへと与えた褒賞なのだとその想いに甘えることにした。

彼女の首筋に唇を這わせる。

「ふゆうっ、あ」

くすぐったいのだろう。身体が硬直し、顔が左上部に振られる。

おれは視線を真ん前に向ける。おれの掌の中、指の間、ささやかな曲線の頂上にはさくらんぼのような赤みがちょこんとかわいらしく息づいている。

唇で果実をはさむと、「ヒッ」という甲高い声が漏れ、彼女の両手が、右手でおれの頭を抱き、左手でおれの口を敏感な部分から引き離そうと力を加えていた。

ウォーリアーの鋼鉄の身体を押しのけるのは女性の力ではまず無理だ。おれはおかまいなしに、このときばかりはまるでこの土地の貴族のように葡萄のふさを舌で転がすのであった。

なにぶん童貞なので全身の隅々まで攻めるような連鎖的愛撫も思いつかず、そのときの俺の手は皇女の胸とお尻を往復するばかりの単調な動きしかしない。

人間の肉体は強い刺激にもやがて慣れる。羞恥心にも免疫ができ

てきたのか、姫の身体からも緊張がほぐれてきたようだ。

「はあっ、はあっ……」

リイナ姫の熱い吐息が耳にかかる。相当な熱量がこもっている。顔だけでなく、まるで風邪でもひいているかのように、全身が暖かくなっている。

おれの視線は、姫の首筋を見つめる位置にあった。

不意に彼女は上半身を起こした。

(どうした?)

皇女は、おれの首に手を回して顔を近づけた。潤んだ瞳、せつなげな吐息。その口元が一瞬、きゅっと結ばれる。

カッンという硬い音がしたのは、おれと彼女の歯がぶつかったときだ。今度は姫の方からの熱い口づけ。

「んんっつ、むぐう」

姫もなかなか情熱的なところがあるようだ。

彼女に舌を搦めるようなテクニックはないと思うが、強く口と口が接すると少し呼吸をしただけでも舌が触れる。

「……！」

「……！」

そのことに気づいた姫がぱつと顔を離し、思わず口を手で押える。

まだまだ恥じらいが強いようで、おれの興奮は逆に高まるばかりだ。

「姫、もう一度よろしいか」

姫は首を横に振る。

(そんな、つれない)

「姫ではありません。いまはただの……なんというのでしょうか」

もじもじと胸の前で指を合わせている。

(ああ、そういうことですか)

コホン。咳払いをひとつ。あらたまつては、おれも呼びづらいのだ。

「リリーナ、あなたはいますターバックス国ではなく、おれだけのプリンセスだ」

「トッシー」

そう。いまのおれと彼女は、皇女と騎士団筆頭騎士ではなく、ただの恋する男女に過ぎない。

こんどはおれの方から唇を。童貞ではあるがキスの経験ぐらいはあるので、ディープに彼女の唇、それから舌を吸った。

「なにか、すごく凶暴な感じがします」

そうかもしれない。胸を玩ばれるより、舌同士の感覚は鋭敏だ。「キスでとろける」なんてフレーズもあるぐらいだし。

リリーナは深いため息のような深呼吸をひとつした。

「慣れているのね」

自分ではむしろ奥手だと思うのだが、純潔の乙女からしたら経験豊富なプレイボーイに見えるようだ。

「そんなこと……ないよ」

「でも、あなたの周りにはたくさん女性の」

「たくさん？ だれのことですか」

「エイプリルやミサキたちがいつもあなたのそばに」

エイプリルは別の国に召還されたアメリカ人の女の子だ。敵の戦力として十分な教育を受ける前に、一手先んじてこちらの陣営に引き入れることが出来た。

「あいつは副官だし、おれのことをそんな目で見ていませんよ」

エイプリルはおれの副官ということになっているが、マイペースでおれの部下という感じもしない。ゲートの外の間人間が数少ないから、おれに愚痴を言っただけだ。

『としあき、早く戻れるようになんとかしろ』

向こう側に帰りたいのは当たり前だろうが、彼女はいつもおれをせつつく。

彼女をこちらの陣営に引っ張り込もうと口説くときに、「元の世界に帰りたいだろう？」と散々心を揺さぶったので、おれは彼女に地球帰還の義務を負うような形になってしまった。そのかわり、彼女も特殊能力を駆使して、おれの軍隊への貢献度も高い。

姫の言葉にもどるが、

「わたしの父もそうですが、地位の高い男はいろいろと方々に女性を囲うものが多いとも聞いていますし。まして、あなたはどこへ赴いても英雄として……」

（「英雄、色を好む」ということを言いたいのかな。まあ、文明度からみても封建的な世の中だよな、こっちは）

温和で話の通じるスタバ王だが、それでもまあ、前時代的な父権をかざしているように見える。

おれは一応救国の英雄ということで広く知られていた。噂と評判が人づてに広まっているようだ。だから、遠征先でもやりたい放題

だろうと、姫は諦観しているようだ。

#7 (後書き)

日刊ランキングにのったらどれだけアクセスが増えるのだろう
軽い気持ちで評価点入れてみないか？ (チラツ)

第一章了

だが、実はそんなこともないのだ。実際、他国の領主に饗応を受けることもあり、気を利かせて美女を侍らしておれをもてなしてくれたこともあった。

正直、ふらふらと誘惑に流されてしまふところだったが、おれのそばには常に前述の女騎士エイプリルや、おれといっしょに地球から巻き込まれ召還した少女、美咲がいて、おれがハニートラップにかかりそうになるとおれの耳を引っ張って耳もとでわめき散らのだ。「あんたね、なに鼻の下のばしてんのよ。こんなのに決まってる。だいたいあんな色仕掛けの宴会に同席させるなんて美咲の、子どもの教育に良くないでしょうが！」

美咲はまだ小学校に上がったばかりの女児だ。ここではおれしか頼れる者がいない。

こんな調子でいろいろ監視が厳しいために、おれだって本当は色に溺れたかつたんだが、いまのところ清廉潔白を貫いている。

まあ、それがおれの良い評判になって民衆から慕われる一因にもなっているのだから悪いことではないのだが。

「ときにとしあき卿、いかがですか。今宵は英気を養っては」

地方の公爵や、やり手の商人には、日本風に言つと「ガツハツハなおっさん」が多くいて、純粹に厚意と労いで夜伽よこを勧めてくれることもあった。

宿で待っていていけば女性が訪ねて来たのだろうが。こつこつチャン
スもことごとくエイプリルがたたきつぶした。

「我らは矛を持たぬ民の盾。女に現まを抜ひかしている暇いとまなどない！」

エイプリルが剣を掲げ高らかに宣言する。周囲は感心しきり。お
れはがっかり。

「そつだよな、リーダー！」

冷たい目線でエイプリルがおれに釘を刺す。

「うん……そつだね」

こんな調子だから、リリーナ皇女が心配しているようなことはま
だ起きてない。

「トツシー、いいのですよ、本当のことを言っても。そつだとして
も、わたしは責めたりしません」

「ほんとうになにもないんです」

無理矢理でも清廉潔白に振る舞わされているので、出会う土地の
者たちはおれを枢機卿かと思ひ込む者までいたぐらいだ。そつでな
くてもおれをテンプルナイトか僧兵だと思っている人間が多かった。

「本当？」

姫は半信半疑のようだ。おれは二度うなずく。(結果的にだけど)

「にわかには、信じられませぬ」

(無理からぬ。結果論だからね。チャンスはたくさんあったし)

思い出すだにいまましいエイプリルの所行。

(でも、姫さま、あなたと民をお守りしたいと思って戦っているのは本心ですよ)

おれは最上の笑みを作って親指を立てた。ビシッ。

「童貞も守れないような男に、何が守れるとこののですか!」(ドヤー)

ビュースとすきま風。

(あ、これ、はずしたな……)と思ったのも束の間。

第二章 義妹と女教師とおれの過去

「キヤー、としあきー、抱いてー!!--」

感激した姫がおれにタックルして、おれたちはぐるぐるとベッドの上を転げまわった。

「はあはあはあ、としあき、もうわたしも恐れませぬ」

壁は崩れ、あとは若い情熱をぶつけ合うのみ。

「痛い!!--」

姫が思わず跳ね起きる。

(あちやー、やっぱりそうかー)

「で、でも耐えます! あなたの戦の痛みに比べればこれしきの」と……」

(なんでいじましいんだ)

おれはいつそう彼女のことを愛しく思うのだった。

次からはきつと、うまくいくだろう。

リリーナ・フォーミュラ・エル・スターバックス姫とのことは心残りだったが、おれは地球に帰って来た。

もちろん、ゲート内世界が抱えるすべての問題を解決してからのことだ。

おれにはどうしても、この世界にもどらなければならぬ理由があった。

リリーナ皇女は泣いておれを引き止めた。

おれもつらかった。

おれはこつちの世界では、あれだけの美人に好意をもたれたことはおろか、ステディな彼女すらいた試しがない。

「行かないでおくれ、としあき」

おれの二の腕にしがみついて、ぎゅうぎゅうとおれの身体を抱きしめてくれた。

サファイヤブルーの瞳から、青真珠のような涙がこぼれる。

その美貌を思い出さない日はない。それどころかこうして授業や休み時間ごとに想い出している。

「ああ、リリーナ。またすぐにもゲートの中にもどりたい……」

そんな夢想到に浸っていると、クラスメイトたちのざわつく声が聞こえて来た。

「なんだ？」

教壇にはいつもの担任教師、それと見知らぬ女性教師が立っていた。年齢は若い。ベージュのスーツに薄い紺色のブラウスを着ている。髪も染めていない、真面目そうな印象の女性。

「えー……今日から三週間……大学の……教育実習……」

担任教師に紹介されたのは、新しい教師ではなく、教員免許を取得しようとする女子大生だった。

「うおー、かわえー」

「ひゅーひゅー」

男子生徒から上がる歓声。女子も珍しい客人に、大いにはしゃいでいるようだ。

短い紹介を終えると、担任教師は教室を出て行った。

(あれ、どこかで見たような顔の希ガス……)

白墨が黒板をこする音。

「中原涼子」、それが彼女の名前だった。

(はっ！) おれは思い出した。おれは彼女を知っている。

(これは……まずいんでないかい?)

彼女もおれを知っている。でも、おれのことをもう覚えていないかもしれない。ほんの短い間、同じ場所にいただけだから。

第二章 義妹と女教師とおれの過去（後書き）

感想と評価ポイントをいただけますと作者の励みになります。
よろしくお願ひ申し上げます。

彼女は自己紹介で、大学の四年生で外国語学部の学生だと言っている。中学高校の教員免許は通っている大学の学部で取得できる教科が異なる。

彼女は英語教師になりたいのだという。

(……気づきませんように……)

ふつう、授業のたびに出欠はとらないが、はじめての授業ということで彼女は出席簿の名前を読み出した。

(あときは、ちがう名前だったけど)

中原先生は、ひとりひとりを起立させて名前と顔を覚えようとしているみたいだ。

「北佐和くん」

「はい」

「塚原さん」

「はい」

「藍川くん」

「うーっす」

うちのクラス連中も行儀がいいのか、わざわざ起立して返事をしている。その都度、中原先生がまじまじと生徒の顔を見つめている。やがておれの番が回って来た。

「双葉……ふたばとしあきくん！」

調子が出てきたのか、教室の空気になじんできたのか、やたら快活な口調でおれの名を呼ぶ涼子先生。

(なんだか、小学校の教育実習みたいだ)

おれは、なるべく彼女と目を合わさないように、やる気のない生徒をよそおってうつむき加減に起立した。

「ウウエイイ (o w o) 」

「じゃ、真面目に返事なさい！」

「は、はい……」

(やば、センサーが近づいてくる)

中原先生は、おれの右斜め前に立った。おれは校庭の方に視線を避けた。彼女は二、三度出席簿とこちらを交互にうかがった。

「先生の方を向きなさい」

「…… (o) (チラッ

—— ()

ササッ

——)

） 3

おれは一瞬だけ先生の方を見た。

「……」

中原さんはいぶかしげに腕組みしている。

「……」

「ねえ」

「……はい」

「どこかで、あなたと会ったことないかしら？」

「いえ、ないと思います」（キツパリ）

ポーカーフェイスで答える。

「気のせいかしら？」

「ですね」（にっこり自然な笑みで）

涼子は、ためいきを一つ吐いた。

「座っていいわよ」

おれは着席した。やれやれ。

教室が少しざわついてきた。周囲からしたら奇異なやり取りだから仕方あるまい。

「先生、どうしたんですか？」

一人の女子生徒が挙手して質問する。

(いらぬことを！)

また中原先生も、いい笑顔で答える。

「先生が高校生のときの同級生に似てたから、ついね」

どつと教室が湧く。ヒューヒュー。誰かが口笛を吹いて囃し立てる。

(うぜーぞ、ガキども！)

また、別の女子生徒が追い打ちを掛ける。

「えーなんでー？ その人のこと好きだったんですかー？」

(やめろって、まじで)

中学生高校生はこういう話大好きなんだよな。

「うーん、そうねー。実は、ちょっといいなって思ったのよね。ちよつとの間だけ同じクラスで、その人すぐ転校しちゃったんだけどね」

（また、あんたもいちいち話を合わせなくていいッて）

「もしかして同一人物だったりしてー」

中原が苦笑する。

「もしそうだったら、落第何年生？　ありえないわよー」

#3

この問いには、クラス一同だれも笑ってない。

「えー？ だって、ねえ」

「うん」

「だよな」

数名の生徒が顔を見合わせた後に、おれの方を向く。それに釣られてクラス全員の首が動いた。

「うっ」

まずい展開だ。

「だって、とっしーは留年大王だしー。たしか先生と同じ年ぐらいじゃなかった？」

（、（O W O ; ; ）ノ オンドウルル オンドウルルラギッタン
ディスクー！）

とうとう確信に近づいてしまった。

「え、留年…… 大王って…… そうなの？ 双葉くん」

「だれが留年大王ですか、だれが滝沢秀明ですか」

「滝沢秀明はだれも言っていないでしょ」

（自分ではちょっと似てると思ってるんだけど）

先生「……」

おれ「……留年は一回しかしてませんよ」

「あら、そうなの」

クラスの連中は無責任なことばかり言う。たしかにおれはいま二歳だが、留年はゲートの中にいた一年分だけだ。

「一度社会人になって、それから高校に入り直したんです」

「ごめんなさい、無神経なこと言ったわね」

「それはいいけど、そろそろ授業はじめた方がいいんじゃないですか？」

涼子は時計を見て、顔色を変えた。

「いつけない、もう10分も経ってる」

教育実習生も期間内にノルマの授業をこなさなければ、教員免許を取得するための単位がもらえなくなるはずだ。

「コホン」

姿勢を正し、咳払いを一つして彼女は授業を開始した。

「じゃ、あらためて。実習が終わるまでの間、よろしくお願いします。す。では、教科書の30ページから、文型の区分についていくつかの例を示します。

1 . You must come back before dinner .

2 . You look great in your new dress .

3 . He quickly finished a few math problems .

4 . She brought me some CDs .

5 . She painted the table red .

教科書の例文の中から、それぞれの文と同じ文型の文を選んでください。

まず、1番の例文から探しましょう

生徒に与えられた時間は一分だった。

「1 . You must come back before dinner .」

これに該当する構文を答えてください。

では、双葉くん？」

おれは立ち上がり、答える。

「選択肢c。『The basketball game starts at four this afternoon.』」

「はい、正解です。同じ答えだった人、手を上げて」

おずおずと数人の手が挙がる。気恥ずかしくて反応しなかった者もいただろう。

「では、『2. You look great in your new dress.』の答えを考えて」

また一分が過ぎた頃、先生は生徒の席の間を歩きながら、一人の生徒の前で立ち止まった。

「はい、どうだったかな、双葉くん？」

（またおれかよー！）

#4

ふたたび指名されたおれは、また正答した。

「bの『You should always keep you
r room clean.』です」

このあたりから、おれも正解が曖昧になってきた。

「3. He quickly finished a few
math problems.」

ここからは30秒の時間しか与えられなかったが、やはり特定の生徒が回答を求められた。

教室の生徒も違和感を抱き始めた。

「『e』
I'll always remember that word
erful day.
です」

「他に正解だった人は？」

先生は、少し嬉しそうに微笑んでいた。

（どんだけ意識してるんだよ）

みんなも同じ事を考えているはずだが、彼女自身はかまうことな

く、質問を続ける。

「4. She brought me some CDs.
The sun gives us light.

残された選択肢は一つ。

「5. She painted the table.
I want you to be honestly.

「はい、よくできました。全部正解できてたら、英語の構文を理解できていることになります。双葉くん、どのように構文を区別したか説明してください」

そこからは、授業の半分をおれが行っているようなものだった。

「えーと、例文の5文は順番を変えて、それぞれ英文における基本の5文型に副詞句を加えています。

- 1 主語 + 動詞
- 2 主語 + 動詞 + 補語
- 3 主語 + 動詞 + 目的語
- 4 主語 + 動詞 + 間接目的語 + 直接目的語
- 5 主語 + 動詞 + 目的語 + 補語

これと同じ構文になる選択肢を見分ける手順で区別しました。

まず文章から主語と動詞を探します。これで構文のSとVが埋まるので、その他の単語を補語と目的語に分別します。

文の前後の「時、場所、様子」を表す語句を副詞句として、選択肢にある文章をS・V・O・Cに置き換えた構文として考えます」

迷うのは目的語と補語の区別だ。

「例文と選択肢はみなさんを惑わせるために、副詞句の数が一致していないものもありますが、文章の構成としては同じものになります。」

目的語と副詞の区別は、論理的にはVの後ろにある語句と、その前方に有る名詞との間に、『aはbだ』『aがbする』という意味が成り立つ場合には目的語、そうでない場合は補語になります」

アメリカ人はべつに自分たちの言葉をいちいち分解して、構文を意識しながらしゃべったり聞いたりすることはないだろう。

「言葉というものは、もともと学問ではなく道具であり、学問やビジネスを英語で行うためには、構文を意識する事無く自由に使えてこそコミュニケーションツールではあります。ですので、会話や英作文を日本語のように使えるようになるためには、暗記するよりも英語に慣れる、馴染むぐらいに、見る聞く書くと、なるべく五感を駆使した学習が必要になります」

授業が終わると、やはり中原先生はおれに向けて、ちらちらと視線を送りながら、去って行った。

昼休みであるが、授業が終わってもクラスメイトたちの好奇の視線がチチラチラと浴びせられている。

「じー」

隣の席の女子生徒が、無遠慮な視線を投げかけてくる。

「なんだい？ 吉岡さん」

「先生と知り合いなの？」

他の生徒は、おれと目が合いそうになると、ささっと目線はずすが、彼女は遠慮がない。

「ちがうよ」

「中原さんの好みのタイプなのかしら、双葉さん」

「かもしれないね」

「チャンスなんじゃない？」

「ははは（苦笑）」

「おつきあいを考えてみてはいかがかしら」

なにを思って、吉岡がこんなことをけしかけてくるのかはわかっ

ている。

「いいねー、教師と生徒の禁断の恋愛ってか」

「わたし、携帯小説家になりたいの」

「知ってるよ。いつも携帯でなにか文章を打ち込んでるよな」

「読者受けしそうな題材だわ。先生とおつき合いできたら、取材させてよ」

「ごめんこうむる。それに涼……先生とはなんの関係もない」

おれの恋愛経験はあまり携帯小説の女性読者向きではないと思うのだが。

「ファンタジー小説を書く気はないか？」

それなら協力できないこともないが、でもそっちは供給先が別にあるのでやはり吉岡にネタを提供することはできないな。

「ファンタジー小説？ あんな超次元ゲートが目の前にあっちゃね、もう空想の入る余地がないわ」

吉岡は窓の外を見た。

都立吉上高校のグラウンドは消失し、いまは異世界への出入り口になっている。イレヴンズゲートと呼ばれるのは世界に十一ヶ所存在し、基本的にはゲートの出入り口が存在する国家が、両世界の通行を管理をしているが、地球側の一部情勢不安な地域や極地などは

国連が管理する例外もある。

いまでも、異世界を見聞したいという勇氣ある市民が千人ほど列を成して通関の順番待ちをしている。

そのため、グラウンドを使えなくなった生徒たちのために、体育授業や部活動は少し離れた市営体育館を吉上高校専用体育館として使用することが認められた。

「そうかもしれないね」

ゲートの向こう側では、かつてのおれの部下たちが、地球人の入国審査を行っていると言吉岡に話すことはできない。

「さて、昼飯だな」

「また、先輩がいらっしやいますね」

「ん？ ああ、そうだな」

吉岡の言う「先輩」とは……ちょうど現れたようだ。ここは携帯小説家志望の吉岡がはじめて彼女を目にしたときの描写に読者のみなさんへの説明を譲ることにしよう。

吉岡がなにか言いかけて止まった。クラスのほかのみんなもゆっくりと一方向へ振り返ってゆく。

「彼女」がはじめてこの教室に姿を見せたとき、

「？」

みんなの視線を追うと、教室の後方の扉が開いていた。わたしと双葉としあきの席は一番後ろの列にあるので、右方向に首を曲げる向きになった。

そして、そこに「あのひと」が立っていた。まるで漫画の中の登場人物に見えた。

まるでアニメーション番組の1シーンか何かのように、緻密な筆致と色彩で彼女はそこに描かれていた。

まず、トラディショナルドールのような漆黒のロングヘア。

神職を思わせる神々しさを放つなら巫女と表現すべきかもしれないが、日本人らしからぬのは、吸いこまれてしまいそうになるほど美しい双眸だった。宝石のように輝いている。

さりとして、近寄りがたい威厳を放っているわけでは決してなく、むしろ保母さんのような温かな笑みをたたえ、教室の空気は和らいで華やいでゆく。

アクセサリーはつけていない。イヤリングはおろか、ヘアバンドすらもつけていない。まったくの自然体で、化粧している様子さえも無い。制服は、わが校のオーソドックスなセーラー服だが、たとえジャージの上下を着ていても、その異彩は衰えることなどないだろう。

人形のような顔立ちだが、けっして不健康そうな色白の肌ではなく、冴え冴えした白さにほんのわずかだけ、ピンク色の頬。陽の当たりが暗いところならば、眼を凝らさなければ気づかないだろう、ささいなコントラスト。

男子たちは呼吸するのも忘れていたかのように、無言で彼女を見つめている。

そんな無遠慮な視線には馴れているのか、表情一つ変えずに彼女は、こちらへ歩いてくる。

(こつちへ?)

教室の後方を足音も無く歩く。スラツと長い手足も、わずかになびく長い髪も、女子にしては少し背が高く、それでいて細い身体つきも、何もかもがカツコ良い。クラス中の視線が監視カメラのように彼女を追う。確かに、これでは「こつち見んな」という方が無理だ。

もうすでに彼女は、わたしの二歩前に来ている。この方向にはわたしともう一名しかいない。

(え、あたしに用?)

と思つたら、わたしの脇を抜いてもう一步前へ。わたしの後ろにはもう一名しかいない。

「忘れものよ」

彼女の楽しげに弾む声を聞いた。そんな彼女の表情を、肩を震わせる愛らしい仕事を、わたしはチラリと見ることに成功する。

「ああ、すまないね。サツキ」

彼女はそつと手首をもちあげる。その指には弁当箱の包み。

「そついえば……」

双葉としあきは社会人学生でかつ、いつも弁当を持参していた。男だてらにまめなことだと感心したものだ。それがだれか女性の手によるものだとは思ってもよらなかった。

「……………双葉先輩」

二人を見て、教室の中には何ごとかを囁き合っている者もいた。

「知ってるのか？」

「ああ、三年のフロアまでちょっと見学に行ったんだ。ほら、ウチの三年に半端じゃない美人がいるってウワサがあつたる！」

勇猛果敢に聖域に侵入した勇者がいたようだ。男子生徒の好奇心、侮りがたし。

その噂の主が彼女であることは、確かめるまでもない。

（それにしても、入学してそれほど経つわけでもないのに、なぜ双葉としあきは上級生の美少女とかかわりを持っているのだろう。しかも弁当の差し入れなんて！？）

しかし、そのときわたしはある事実気付いた。なぜ、もっと早く気付かなかつたのだろう。

（あれ、待てよ。双葉としあき……………双葉サツキ……………、サツキ……………先輩！？）

と、まあ、最初に我が妹を紹介したときは、吉岡もたいそう驚いていたようだ。

「兄さん、いつしよにお昼を食べない？」

なんとも奇妙な話に聞こえるだろうが、同じ学校に通いながら、妹のサツキがおれの上級生なのである。

「そうすることにしよう。屋上でも行くか」

クラス中の注目を集めながら、上級生がいつしよに教室で食事するのも、上級生下級生双方が食べづらだろう。

おれは席を立った。廊下に出ると、屋上に続く階段へ歩き出す。

向かう先は廊下の一番突き当たりだ。

「おい、そんなにくつつくなよ、恥ずかしいじゃないか」

サツキの肩がおれの上腕に触れるほど、ぴたりと密接して歩いている。

「そんなこと気にするなんて、おかしいの」

彼女が楽しそうに笑う。ころころと弾けそうなほど明るい笑顔だ。

廊下を歩く彼女を目にしたすべての生徒が、無意識に彼女が振りまく、柔らかなオーラに照らされる。

並んで歩く二人は、兄妹というよりまるで恋人同士のように……
見えないな、やっぱり。

もうすぐ六月だ。梅雨になれば、屋上のベンチで食事をできる日は少なくなるだろう。昼休みにまっすぐここへ来た数名の生徒が、すでにそれぞれの弁当の包みを開いている。

おれたちは、転落防止用のフェンスを背にするかたちで同じベンチに座った。

「はい、兄さん」

サツキがサンドイッチをワンピース、おれの口元に運ぶ。

「……」

対面には男子生徒の三人組がこちらを、どこか呆れたように見ている。

(うつつ、恥ずかしい)

おれはサツキの手からパンを取ると、それを自分の手であらためて口に入れる。あまりにもおれたち二人の佇まいは違い過ぎて、周囲の人間はおなじ環境の中にイメージが結びつかない。

『妹さん、すごい美人ですね』

よく言われることだ。その後に必ずこうも言われる。

『似てませんね』

そりゃ、そうだ。血がつながってない義兄妹だから。

彼女と兄妹になって、もう何年経つだろうか。はじめて出会ったのはおれが一二歳でサツキが九歳だったはず。

おれが親父に引き取られてからすぐ、というより初対面の瞬間から、サツキはおれになついた。

「兄さん、クリームソースがほっぺについてる」

「うん？」 サンドイッチからはみ出したサワーソースの感触。

「ペろっ」それを小さな感触が、温かくて濡れた舌がなめとった。

「ひゃああっっ」

おれは思わず乙女のような声を漏らす。

「うふふふ」

サツキは、以前からお兄ちゃん子だったのだが、おれが一年の間ゲートの中にいて離ればなれだったこともあって、最近は行動がエスカレートしてきている。

「おまえなー、家の外では控えろって言ったろ」

「うふふふふ」おれがゲートから帰還してからは、基本的にはいつも上機嫌の妹である。

おれたちの異常な仲の良さが、学校内でも噂になりつつあるのは
自覚しているのだが、妹はまるで気にしていないようだ。

バタツ。牛乳パックの地面に落ちる音。おれたちのものではない。

そこに立っていたのは、ゲート内世界ビヨンドにおいてはスターバックス騎士団の副官としておれと行動をともにしていた女性、エイプリル・カエノメレス。

なんで彼女がこんなところにいるかというところ、ゲートから11人の召還者が帰還してしばらく経った頃、彼女の故郷アメリカから、急に日本へ引っ越してきたのだ。

そのときも一悶着あったのだが、それはまたあとで説明することにする。とにかく一八歳の彼女は日本で暮らすことにして、この吉上高校に転入してきたのだ。

学年はサツキと同じ三年生。クラスはちがうが、サツキもおれとエイプリルの関係は知っている。つまり、彼女もまたおれの上級生ということになる。ゲートの中とは上下関係が逆転してしまった。

身長はおれとサツキの間ぐらい。アメリカ人だが、日本人に近い黒髪のショートヘア。ショートになったのは、おれがある事情で咄嗟に彼女のロングヘアを剣で断ち切ってしまったからだった。

ブリュネットという言葉は、栗毛の女性を指すのだと思っていたが、英語では黒髪の女の子もそう呼ぶのだと後に教えてくれた。

『髪を斬って悪かったな』とおれは謝ったが、彼女はあきらめたように、戦地においてはショートのままだった。帰還後はしばらく伸ばしていたようだが、来日したときには再びショートヘアにしていたのだった。

彼女は日本の女の子が肌の手入れを怠らないことに驚いていたが、郷に入ればなんとやらで、それまであまり気にしていなかったそばかすを、せつせとファウンデーションで隠すようになってしまった。

(べつに、そのままでもかわいいのに) 声に出すと、サツキがなにか言いそうなので、おれはだまっていた。

「おふたり、恋人みたいね」

おれはコーヒーを吹き出した。

「あら、そう見える、エイプリル？ どうしましょう、兄さん」

「お、おかしなこと言うなよ、エイプリル」

「あなたたち、いつもそんなにベタベタしてるわけ？ 正直、ちょっとキモイんだけど」

おれは狼狽したが、サツキは対照的に顔をほころばせている。

「そらみる、サツキ。おまえはこれが普通だなんて言うけど、第三者から見たら、おれたち相当変な関係に見えるんだぞ」

「エイプリル」

サツキがエイプリルに質問をした。

「あなた、兄弟はいる？」

「いないわ。一人っ子よ」

「お兄さんがいないからわからないのよ、兄妹ならこれが普通よ」
「サツキは両腕をおれの左肩に回してきた。ぴったりとくっつき、あごを肩に乗せている。」

(いやいや、そんなことないだろ)

エイプリルもぶんぶんと首を振った。

「アメリカにだって、そんな兄妹はいない」

「じゃあ、国民性のちがいね」

苦い表情でいたエイプリルがふっと、口元をゆるめた。

「いいわ。わたしは兄弟がいないから、二人を見て正直少しづらやましいかなって思う」

彼女はおれの隣に座って、牛乳パックにストローを挿した。

「としあき卿……ゲートの中でもこっちでもモテモテなのね」

「ブホオ！」

第二章了

おれはふたたび、牛乳を吹き出した。

「あら？ それは初耳ね。どういふことかしら、エイプリル」

サツキの頬がびくりと痙攣しているのを、おれは見逃さなかった。

「授業中に教育実習の女子大生にアタックされてたつて聞いたよ」

エイプリルの口調にまるで悪気なし。あとで久しぶりの軍議を開かないといけない。サツキはおれにとっての爆弾なのだを教えておけばよかった。

「兄さん、そんな面白いことがあったなんて報告しなかったわよね」

さきほどまでの天使のような笑顔から一変、いまは憮然とした仏頂面になっている。

「面白くない、面白くないって！」

つぶらな瞳が、いまは疑念をたたえて細められている。

「例の、『裏の仕事』がらみの女なんだ。五年前に接点があって偶然、教育実習生でおれらのクラスに来てしまったんだ」

「例の仕事つてなによ？」

エイプリルは、おれがゲートの中に召還される前のことを知らな

い。どうして、おれがイレヴンズゲート十一柱と呼ばれる召還戦士のなかで、世界の命運を賭けたゲームのキャスティングボードを握ることが出来たのか。

「でも実習生は、としあきのこといろいろ根掘り葉掘り聞いたけど、彼は他人の振りしてたって」

サツキのただならぬ様子に、エイプリルはおれをフォローする側に回った。

「そんなの、当たり前よ！」

(ひえー)

サツキの怒りがエイプリルにも向けられた。

この怒り方は尋常でないとエイプリルも思い知っただろう。

「あ、でもさ、としあきは彼女の知人だってことをかたくなに否定してたってよ？ 先生の方は昔好きだった人に似てるって言ってたらしいけど……」

「馬鹿！ よけいなことを」

エイプリルはいつも、良かれと思っておれを窮地に陥れるのだ。

「へー」

ギロツッとサツキの瞳がおれたちを刺す。おれはは彼女と視線を合わせぬよう足元の、ゴム状の床を見ている。首筋には脂汗が浮か

んでいた。エイプリルはフォローどころか、とどめを刺してしまっ
たようだ。

サツキが立ちあがった。鬼のような形相で、ベンチに腰掛けたま
まのおれを見下ろす。

「どうなのよ？」

ガッツ。腕組みしたまま、彼女のつま先がおれの脛を蹴りあげる。

「ヒィッ！」

思わず、エイプリルが声を漏らした。

「いくらなんでもひどすぎる。これが兄に対する妹の態度？」

「うるさい！」

髪を振り乱し、目元が乱れ髪に隠れる。

「だいたい、あんたも何なのよ。わざわざアメリカから日本まで来
て兄貴のそばをうるうと」

どれだけの時間が経っただろう。彼女の顔色を伺おうとする。ま
だ同じ目で見下ろしている。まるでエイプリルも同罪のように、冷
たい眼差しを向けられていた。いつのまにか、彼女の視線もおれと
同じく足元だけしか見ることができなくなっていた。

(うつつ、とんだ昼休みになってしまった)

おれは授業の予鈴を待ちわびた。どれだけの時間そうしていたのだろう。はてしなく長い時間に感じられた。

リンゴーン、カラングローン

お待ちかねの予鈴。これでようやく、この重苦しい空気から解放されるとほっとした。

「さあ、午後の授業だ。しっかり勉強しよう」

この痴話げんかは他の生徒にも聞こえていて、屋上にいる生徒たちも啞然として、われわれの背中を見送っている。

エイプリルは恥ずかしさで、サツキは怒りで顔を真っ赤にして、おれの後をついてくる。

「兄さん、今夜は家族会議だから」

サツキが冷たい声でつぶやく。

第三章 どうしてこうなった (。・。)

え？ どうしてそんなに妹を恐れるのかって？

そうだねえ。みんなも不思議に思うだろう。

もちろん腕力で妹にかなわないなんてことはないし、兄妹といっても養子だから家族の中で引け目を感じているとか、そういうことで頭が上がらないわけじゃない。

それどころか、彼女には出会った日からよく懐かれたし、おれたちは仲の良い兄妹だった。おれを引き取ってくれた親父に感謝を。

いま、おれたちはあるマンションに二人で暮らしている。親父がいれば、おれはサツキの扱いに困ることはなかったのだが、生憎親父はおれが15歳のときに事業に失敗し、あまつさえいくつかの不法行為も明るみになってしまい、ここ6年の間は別宅で過ごしている。けっして帰宅できない「別荘」なのだ。それまでは大変裕福な家庭だったので、おれは何不自由なく、故郷にいた頃より快適な毎日を過ごしていた。

『としあき、頼む！！ サツキだけはわたしに代わって必ず守ってやってくれ。おまえならできる！』

『わかったよ親父、絶対にアイツはおれの手で守るから！』

刑事に連行される親父と、固い約束を交わして別れた。

親父が止めなければ、警察官を殴り倒していたかもしれない。

一時は耐乏生活を経験したが、おれは高校をやめて働きに出た。サツキは泣いてばかりいた。せめて彼女だけは、普通にそれまで通りの暮らしをさせてやりたい。

働いて働いて、マンションを買うぐらいのお金を得ると、おれは20歳になっていた。そしてゲートの中で一年を過ごす。高校に再入学した直後のことだった。

サツキには寂しい想いをさせたから帰還後、おれにやたらとべたべた接してくることも最初は違和感を覚えていなかった。

「……どうしてこうなった」

昼休みにサツキから通達された家族会議。とは言っても、いま家族はおれと彼女の二人しかいない。

おれがどうして家族会議を恐れるか。

「さあ、さっさと脱いで」

サツキが制服のネクタイをはずし、ブラウスのボタンに手をかける。

「なあ、もうこういつのはやめにしないか？」

「いいから脱げ」

サツキがおれのシャツに手をかけて力まかせに引きちぎる。

「わかつたって。脱ぐ脱ぐ」

おれとサツキの家族会議。それはお互いが裸になって行われる、兄妹会議だ。兄と妹の間に隠し事があつてはならないというサツキの強い信念に基づくものである。

スルツ、パサ。ブラウス、スカート、ネクタイが順番に床に落ちていく。

「ジロツ」

おれがまだ上半身しか裸になつていないのを見て、キツイまなざしがおれの肌をさす。

カチャカチャ。ベルトをはずして下着一枚になる。おれの両腕には、肘から手首を覆うように赤い布が巻かれているが、これがちよつとしたマジックアイテムなのである。

スルリ。サツキはパンティを脱いでしまった。

(包め)

おれが念じると、赤い布が一反木綿のようにおれの腕から離れて、幅を伸ばしていく。露になったサツキの胸元から下腹部をすべてぐるぐる巻きにした。

「こんなもの！」

サツキが力を込めたぐらいで破れたりはいしない。ジェット燃料が燃えうつつても焼けたりはしない素材だ。

「サツキ、はしたないから女の子がかんたんに人前でマツパになるんじゃない」

「なによー、元祖裸族は兄さんのくせに」

彼女の言う通り双葉家に迎え入れられた頃、おれはふだん裸でうるうるしていることが多かった。

幼いサツキは不思議そうな顔で尋ねたものだ。

「お兄ちゃん、なんでいつも裸なの？」

一般常識のないおれはとんちんかんな答えをした。

「サツキは女の子だから服を着た方がいいけど、男はふつう裸で過

「すすものだよ」

そんなおれを見て、親父は眉をひそめた。

「それは、ここでは普通ではない。夏で暑いから裸でいるのかと思っただが、もう秋だぞ、いいかげんに服を着るんだ、としあき」

家の中とはいえ、おれの真似をして、サツキがパンツードで歩き回るようになって親父はおれをきびしくいさめるようになった。

「いい加減にしろ。サツキの教育に悪影響があるだろう！」

父に叱られて、おれはこの習慣に合わせて、渋々服を着るようになった。

「斯くなる上は」

サツキは魔布まふに包まれたまま勢いよく床を蹴り、おれに向かってダイブした。

彼女の体当たりをかわしてしまっわけにもいかず、両腕を縛られている彼女をこの胸に抱きとめた。もう18歳だから身体も十分に発育して、出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる。

「スキあり！」

サツキの唇がおれのそれに触れようと迫ってくる。

「おっと」

顔を背けたら二枚の花びらを合わせた感触が首筋に触れる。

「なんでよけるのよ！」

「よけるぞ」

「ごうしてやるー！」

ムチユーツ。彼女はキスマークをつけようと、おれの首筋を強く吸う。

「おいしい、学校へ行けなくなるよ」

「あの教育実習生にキスマークを見つかればいいんだ！」

(はああ、それが目的か)

「彼女とはなんでもない。なんでもないって。仕事のことは知ってるだろ」

薄布一枚はさむだけで、サツキがおれの胸元で暴れている。

「ミッシヨンだけじゃない。ビヨンドでも色んな女とつき合ってたんでしょー！」

ゲートに隔てられた世界を、もっぱら地球人は「ビヨンド」と呼んでいる。「向こう側」という意味だ。

「……そんな、ことはないよ？」

「いま、一瞬間が空いた。絶対、嘘ついてる！ 妹のあたしを差し置いて、他の女にうつつを抜かしやがってー」

まるでだだっ子だ。

「ふつう、そこで妹は差し置くだろ」

「兄さんは、とっしーはあたしだけを見てればいいの！」

ゲートに行く前からブラコンの気味はあったが、最近とみにヤンデレ化が進んでいるようだ。

「おまえ、学校でもてるじゃないか。彼氏を見つけたよ」

ぶわっ、とサツキのまぶたから涙があふれた。

#2 (後書き)

週2〜3回の更新予定。

お気に入り登録しておく、更新がわかりやすくて便利です。

#3

「あたしが、他の男に寝取られてもいいっての!?!」

「やらしい言い方すんなよ」

彼女は文才があるので、変に大人びた言葉を使うことがある。

「パパと約束したでしょ、あたしの伴侶になって一生守るって。誓いを守りなさいよ」

「一生とも伴侶とも言ってないぞ」

おれの口まで自分の唇が届かないのが口惜しいのか、おれの鎖骨を口にくわえた。

「くすぐりたい」

ガジガジガジと、おれの骨をかじっている。

「あたしの夫になれ、としあき!」

「だが断る!」

「なんでよ? あたしの小説のファンはみんな妹萌えばかりなのに。なんで兄さんはあたしに萌えないのよー」

「その理屈はおかしい」

「おかしくなんかない！ 兄さんをモデルにしたんだから本人も妹萌えであるべきなの！」

「なにその、アニメの放送が終了したら原作も終了みたいな理屈！？」

トウルツルルル。電話が鳴った。携帯電話でなくファクシミリ一体型のこの電話番号を知っている人間は限られている。

「出た方が良さそうだな」

「チツ」舌打ちして、サツキは電話の方を見た。

「電話に出るからこれはずしてよ」

「ああ」

(リリース)

彼女の身体をバドガールの衣装のように包んでいた魔布の緊縛が緩んで、ただの布になった。

「よっ、と」

自由になった手をおれの胸元について、彼女は起き上がろうとした。その手が胸元からずれておれの首に回された。

「むぐっ」

油断大敵。まんまと唇を奪われた。

おれ「むあい、ふあゆあく、でゅんわにでれ（おい、はやくでんわにでろ）」

サツキ「んー！」

なるべくその時間が長く続くよう、サツキはおれの首にかけた手に力をこめる。

なんだか不憫な気もして、おれは妹のするがままにしていた。けっしてタブーや罪悪感を感じているわけでもないし。

むしろ自分を好いてくれるその感触は心地よく癒しを感じるほどだ。

だが、おれは彼女の気持ちを受け入れるわけにいかない。ビヨンドでリリーナ姫に対して抱いたような強い情念までは、おれはサツキに対しては持ち合わせていないからだ。

血がつながっていないくとも、一年も過ぎた頃にはおれは彼女を自分の妹として認識していた。自分は3人兄弟妹なのだ。血のつながった実弟となら変わらない存在となっていた。

彼女を愛しているが、それは家族愛だ。

親父が逮捕され、高校をやめて飲食店でアルバイトを始めたとき、当時の吉上高校生徒たちは、涙を流しながらおれを励ましてくれた。一年生で生徒会の役員もしていたので、生徒会長がたいそう残念がった。

担任教師は奨学金の受給を勧めてくれたが、親父の負債があまりにも大きく、債権者もまさか高校生と中学生の兄妹にその支払いを求められることはなかったのだが、家もなく安アパートに引っ越した身では、生活費と妹の学費を稼ぐために働くことを選ぶしかなかった。

比較的すぐに状況を理解したおれに選ぶという意識もなかった。可能な限り、それまでの生活に近いレベルというのは、無理な話だった。金が無いというより、それまでがありすぎていた。おれの実家も特権階級ではあったが、物質的にはここでの暮らしの方がより恵まれていたほどだ。

きゅぽん。サツキの頭を両手で掴んで、唇を引き離した。

「にまー」

彼女が笑った。今日は彼女に一本取られた。

機嫌が直ったのか、小さくメロディを喉でならしながら今度こそ、電話をとりにもかった。

心なしか足取りも軽い。かわいいお尻がスキップに合わせて揺れる。

少し親父くさい目線に、おれはなっているかもしれない。

彼女は一糸まとわぬ姿のまま、コードレス電話を手にとる。

「はい、双葉です……どうも」

ファックス機能付きのこの番号にかけてくるなかに個人はいない。だれがかけてきたか、可能性はあらかじめ限定できる。

「ええ、どうも。前回の印税は入金を確認しました。領収書はいらないですよね……えーと、入金の確認じゃない。では、なんでしょうか」

やはり出版社の丸山書店のようだ。サツキの買った小説を販売してくれている会社だ。

サツキは少女小説家としても、ちょっとした有名人なのである。個人情報が知れると、静かな生活ができなくなるので、プロフィールは簡潔に高校生とだけ、小説賞の授賞式にも出席せず、写真も公開はしていない。

双葉サツキが小説家・宵闇心音と知っているのは、出版社の担当編集者、編集長とおれだけ。

彼女の書くものは、中高生を主な読者と想定したファンタジー小説で、いわゆる「ライトノベル」と呼ばれる分野の作品だ。

電話で話す声は大人びている。話しながらも、スラリとしたシルエットを惜しげもなくおれに見せつけている。

おれは女性の背中を見るのが好きだった。ビヨンドのお姫様たちの衣装の中でも、背中が大きく開いたドレスにおれは目を奪われていた。

童貞だったときは、異界の巫女たちの胸元を強調する装束にどきまぎしていたが、女性慣れしてからは貴族の子女が見せる裸の背中に性的興奮を覚えるようになって、それはいまでも変わっていない。

異界の美女たちと比べても、我が妹の背中の美しさは負けていな

い。白く柔い肌に癖のない艶やかな黒髪のコントラスト。絵画の裸婦像ともちがう今どきの若者の骨格。現代アートとっていいほど「様」になっていた。

彼女はいま一人のアーティストと呼ばれるか、クリエイターとして企業の担当者と思疎通をしている。彼女が一人の大人として、社会とつながる部分だ。まるで企業のオフィスレディーのように立ち、ビジネスの電話を受けるその様は凜としてカッコいいものだった。なかなか堂々としたものだと感じする。

おれにとって自慢の妹だ。ただし、おれを性的な目で見ないでくれれば。

ところで今日はなんの話をしているのだろう。彼女の作品は先日、完結作を発売し次回作の予定は入れていない。

第三章 了

「新作？ 先日お伝えした通り、家事と学業のために執筆をしばらくお休みしようと思っています」

おれがビヨンドより帰還してからは、彼女は新妻のようにおれの世話を焼いてくれている。小説もおれの帰還直後に出版したものを最終巻とするように丸山出版へ伝えその後、なにかを書いている様子はない。

「構想もしてませんし、とりあえず大学に入学してからゆっくり… 待てない？ でも今のシリーズではもう書くべきことはすべて書き終えたとお伝えしましたよね」

彼女の人気作はちょうど区切りのいいところで最終巻を迎えた。折しもアニメーション番組原作としてのテレビ放送も決まったところだ。

「テレビ放映が始まるからって……それはこちらの関知することではないし、承諾はしましたけど、こちらから頼んだことではないですよ」

最終巻刊行後にテレビ放送というのは、企画がまとまるのが少し遅れたためで、ずいぶん前から話があった。ライトノベルのアニメ化には二つの目的があるらしい。一つはDVDなどの映像商品の収益。もう一つは原作の販売促進になること。

「ええ？」

少し苛立った声で、いくつか言葉を交わした後、サツキは電話を切った。

「どうしたんだ」

妹は全裸のままテーブル上のノートPCを開いた。webブラウザを立ち上げる。

「おや？」

宵闇心音の新作情報があった。

「発売日未定だけど書きを書いていたのか」

「書いてないよ。わたしに無断で新作の発売を決めたんだって」

なんとも大胆な営業戦略である。

「おいおい、そりやまずいんじゃないの」

彼女の作品は出版社の株価に影響を与えるくらい売れている。だからシリーズを引き延ばしたいのもわからないではないが。

検索すると読者ですら完結したと思っっている人間が多かったので、まさかの続巻刊行はいろいろなブログでニュースとして取り上げられている。

タイピングするサツキの指が止まった。

「どっしり……」

サツキが小説を書き始めたのはおれが失踪する前からだった。幸いなことにそのころには、我が家の家計は大幅に改善していた。だからビヨンドにいる間も、彼女の経済環境を心配してはいなかった。帰還すると、彼女はベストセラー作家になっていた。我が家に戻ってきて、そろそろこの作品を終わりにした方がいいと助言したのはおれだった。サツキも素直に従った。

この作品を続けていると、そろそろ面倒なことになると彼女もわかっていった。

これからはゲートを行き来する人間が増える。やがては、この作品がビヨンドの国家や民衆の生活を忠実に描いていることに気づく人間が出てくる。そして、この小説は11大ゲートが開いて異世界の存在が広く知れ渡る前に書かれて出版したものだ。

サツキの肩が震える。泣いているのか。

「どうした？」

「どうしても『シュヴァリエ！』の続きを書いてくれないと困るって」

「勝手に発売を決められても、こっちの知ったことじゃないだろ」

「もう発売の告知をしたものを中止したら不祥事になるって。編集の五木さん、わたしを説得できなかったらクビになるって、電話の向こうで泣いてた……」

「あの人か……作品を終わらせることに同意してくれてたが、上を説得できなかったのか」

おれもサラリーマン経験があるから、企業のなかで往々にしてそういうことが起きることは想像できる。

「なにかお話してよ、兄さん」

サツキが立ち上がっておれの胸に飛び込んでくる。

ムニユっと、やわらかいオノマトペが原稿用紙に響く。おれの胸板にはりつくようにふたつのマシユマロがその形を変幻自在に変えていく。

「サツキ」

「不安なんだよ、兄貴。わたし、どうしたらいいの？」

そう言われては、ちよつと突き放しづらい。

おれは気づかなかつた。顔を伏せたサツキがぺろっと舌を出していたことを。

おれも彼女の背中に手を回す。相変わらずの全裸兄妹のままです。

彼女の猛アタックには正直、気の迷いを起こすことが時おりないではないが、男女の関係になってしまったら、いつか関係が終わるときが来るかもしれない。

強いていうならば、気を持たせてしまうのが怖かった。

兄と妹の絆は永遠だ。恋人や夫婦は終わってしまえば、離ればなれにならなくてはならない。

だからギリギリのところ、おれはサツキとは男女の一線を越えないようにしている。

おれは時計を見た。

ちょうど今夜から、時間ももうすぐ、彼女の作品を原作としたアニメーション番組の放送が始まる。

第三章 了（後書き）

三章が終わりました。

評価点を入れていただけますと励みになります。

m
r
*
mペロッ

第三・五章 剣闘都市（ケントウリア）

テレビ東京系列 金曜日深夜26時30分（土曜日2時30分）。

「テレビを見るときは部屋を明るくして離れてみてね」のテロップが流れる。

昭和65年1月1日、一人の女性が赤ん坊を出産した。その日は日本でただ1日だけ、人を傷つける事故や事件が1件も起きなかつたおめでたい日。

午前9時20分、午前中には珍しく雷鳴が鳴り響き、嵐が近づいてくるような天候。

母は夫につぶやく。

「赤ちゃんは、なぜ泣きながら生まれてくるのでしょうか？ 残酷な世界に産み落とされたことが悲しくて泣くのかな」

少し皮肉を含んだ妃の言葉に王の顔が歪んだ。

医学書を読むと、母親の胎内から這い出して自分の力で呼吸をすること。そのために赤ちゃんは泣くのだという。

「王子が息をしていません！」

「こら、泣きなさい！…！」

たまに産声をあげない子どもがいると、お医師さまや助産師さまは赤ん坊に呼吸をさせるためにお尻を叩いて、無理にでも泣かせる。

「こんな子、初めてだよ。さすがシュヴァリアの王子」

その子もやはり泣き声をあげずに生まれ出でた子ども。取り上げてくれた助産婦たちをたいへん困らせた。

「先生、どうしましょう?」

「えい! えい!!」

女官がいくらお尻を叩いても、彼は泣きもしない。

「こまったな・・・」

すでにお尻は何度もひっぱたかれて真っ赤っかになっている。

医師が口元に耳を近づけ、呼吸を確かめた。

スーハースー。

「息はしているな」

医師は最後にお尻をぎゅっとつねった。これには王子の顔も痛みにゆがんでいた。

「ヴ、ヴヴヴウウウ」

やがて、彼は獣のような唸り声をあげた。どこから声を出してい

るのか、地獄の底から響くような気味の悪い泣き声であったという。

「ま、まあ、いいだろう。ほら、肝っ玉のすわった王子様ですよ」

赤子は心配そうに見守る王と妃の手に返されるのだった。

剣闘都（ケントウリア）とも呼ばれる傭兵国家シュヴァリアは、ビヨンド11大国家のひとつ、騎兵国家イストモスを形作る小国家のひとつである。

イストモスの正式国名はケンタウロス首長連合国と言い、部族性国家の緩やかな連合体であるのだが、大別してイストモス・ケンタウロス（西側に住むケンタウロス、重装を好む）とオストモス・ケンタウロス（東側に住むケンタウロス、弓術に長け軽装を好む）の二派に分かれている。

獸人各部族をそれぞれのハーン（族長）が統率しており、かつては偉大なる建國者を祖とする大首長を王としていたが、その血筋が途絶えた現在は首長達の合議制で国の方針が決定している。

ビヨンドの東方に位置する、鋼に身も地も包んだ騎士団国家イストモスの中で、最も過酷な兵役を国民に課すシュヴァリアは、周辺の国家や部族から「アイツらは頭がおかしい」ともっぱらの評判になるほどの戦闘民族であった。

国民男子は全て兵役に就き、主たる産業は傭兵の派遣という徹底ぶり。

シュヴァリアでは、子どもは国の財産として扱われていた。同国の子どもは7歳になると厳しい軍事訓練を課せられ、その過程で脱落した子どもを殺害していき、残ったものだけを市民として育てる。

現代日本の教育とは対極の子育てだが、シュヴァリアではまず、親は自分の子どもを自由に育てる権利を持ってはいない。「子どもは軍事国家シュヴァリアのもの」とされ、生まれた子どもはすぐに長老の元へ連れて行かれる。そこで「健康でしっかりした子」と判定されれば、育てることが許されるのだが、病身でひ弱な子どもは「生きていても国の為にならない」として、子捨ての淵と呼ばれる特異な空間へ投げ捨てられてしまった。

この悪習を改めさせたのは、現王妃カーチャン・ヒムロ・シュヴァリエ。

不定期に現れる異空間移動ゲートを通称、小ゲートと人々は呼んでいたが、子捨ての淵も実は異世界に通じる次元の穴なのであった。

その穴からひょっこり現れたのは異世界人の女性、氷室果綾。なんだかねで王太子の庇護を受けるうちにその妻となる。

やがて二児をもうけ、一人目の子どもを「トシアキ・デスブルーフ・シュヴァルツ」、二人目の王子を「シモンキン・デスマーチ・シュヴァルツ」と名付けた。

代々王家の男子は殺しても死なない不死身に近いデスブルーフ（耐死）能力を持っているがために、この戦闘民族の王族として国民から崇められていた。

7歳になった子どもたちは学舎へ入る。王子も例外ではない。いくつかの組に分けられ、同じ規律の下、生活と学習も一緒に行われるのだった。そこでの規律は「国家の命令に服従すること」「訓練に耐え、闘ったら必ず勝つこと」などで、服を着ることは許されず、頭は丸刈りにされ、革のホットパンツと足に具足（防具）をつけて訓練をした。

教育は成人するまで続き、公人として国に仕えているという自覚を常に求められ、やがて成人すると他国へ傭兵として送り出されるか、ある者は戦闘教官になり、子どもたちに訓練を施す側に回る。自国が戦争になれば、傭兵は帰国して軍団に編入されるのだった。

好戦的な部族やときには成熟した商業国でさえ、自国でもシュヴァリアと同じような教育を施そうと提唱したことがある。彼らの誤りは、シュヴァリア人の教えが普遍的な精神論であると錯覚したことだった。

子どもたちに競争をさせれば、強い国が出来るという論理は誤りである。

シュヴァリアの教育は競争教育ではない。他人と比べて優劣をはかる相対主義ではなく、シュヴァリア人として生きるために必要な下限を設けた、生死のかかった絶対評価主義の教育である。

シュヴァリア人の教えは哲学ではなく、生きるか死ぬかの二元論でしかない。獣人国イストモスの中で最も人族に近い種族として周囲の獣人領から自国を守る、数多の獣を迎え撃つ宿命が、必然としてシュヴァリア人に戦士として生き、戦士として死ぬことを最上の榮譽とする人生訓を育んだのだった。

シュヴァリアの教えを実践できるのは、シュヴァリア人だけである。

その証拠に、シュヴァリア人の生活には厳しい軍国主義とは相反する共生主義が根付いている。土地の均等配分、民会設置、装飾品の禁止、共同食事制が彼らの生活基盤である。

シュヴァリア人は武技を競うが、いくら戦で武功を立てても個人に栄達はない。報賞も財産も与えられはしない。

能力を認められて、指揮官になったとしても、住む家と禄は他の兵士と変わらないのだった。

与えられるものは名誉のみ。戦を重ねれば、戦績は盾に勲章のごとく刻まれた。

王妃は王の妻となる前から、これを疑問視していた。王を驚かせた彼女の言動のはじめが、「昨日の思想によって子どもたちを縛るのは教育ではなくて訓練に過ぎません。明日の思想によって子どもたちを縛るのもまた訓練であります。教育は訓練ではなく、創造であるべきです」

王曰く、

「そのような考え方をする人間にこれまで会ったことがない」

妃はゲートを通る以前にはなかった魔力をこのビヨンドで使えるようになっていたのだが、そのことを夫と子ども以外には伝えなかった。

少しずつ少しずつ王妃は、シュヴァリアを文明化しようと心を砕いていた。やがて、役に立たない子どもをいきなり淵に落とすという習慣も廃れていく。

国民皆兵の国は未だに残り、第一王子は軍事教練の課程に入った。シュヴァリア人の母は皆、髪を引かれる想いで我が子を見送るが、7歳の王子は王妃に深々と頭を下げると涙ひとつも見せずに入校の隊列に加わるのだった。

(さくら さくら)

やよいの空は 見わたす限り

かすみか雲か 匂いぞ出ずる

いざやいざや 見にゆかん)

王族であつても、教練場ではなんら特別扱いはされないが、人一倍強靱な肉体を持つ王子は脱落しそつになる他の子どもらの手を引いて、厳しい修練を積んでいた。

夜ごと、頭の中に異国の唄が響く。

(母上、毎夜お言葉をかけていただきありがとうございます。お気持ちは嬉しいのですが、女王陛下から特別な計らいを受けることを、仲間たちの手前もあり、心苦しく思います)

「(……) し」トシちゃん、だれも聞いてないからママと呼んでいいのよ」

トシアキ (……) 「つーか、母上。毎晩毎晩頭の中に入っていないでください」

「(……) し」ケンカの練習ばかりじゃ立派な王様になれません。だからこつとして母の国の言葉で語りかけているのです」

トシアキ (……) 「母上、女王自らが国民の義務を否定するよ

「な」と言ったらスムーズですよ」

周囲の学徒たちは、ぐっすりと寝入っているが、起きていたとして王子が母と会話していることに気づく者などありえない。

氷室果綾は次元の壁を超えたときに、高等魔法のひとつである「ダイレクトヴォイス」を会得していた。生身の人間が次元の歪みを通ると思いがけない影響が身体に現れることが多い。ダイレクトヴォイスは直接、目の前にいる人間はおろか離れた場所にいる者の心へ直接自分の言葉を届ける力だ。相手もそれに返事をする事ができる。翻って言えば、テレパシーが使えるということなのだった。

母の目的は我が息子との交流などではない。

次代の王に相応しい教養を授けること。軍人としての才覚しかない夫を超える明君に育てなければと、母は義務感に駆られていた。

母は日本語で語りかける。子ははじめのうち、その意味を理解できなかったが、言葉といっしょに意味が字幕のように、ふたつのイメージとなって螺旋状にきりもみしながら頭の中へ届けられる。

人権・平和・平等。父が知らぬ概念を子は学んだ。

シュヴァリア人のトシアキにとって、それはなんだか生温く、さりとして母の心の礎となるものであることを悟り、無下にはできないのだった。

こうしてシュヴァリア人の中では唯一、現代日本人的教養の基礎と、片言の日本語を覚えた。

そして初等教練の課程を終えると、シュヴァリア人は戦争に派遣することを許された兵士とみなされる。一人前の戦士として認められることが、社会の一員となることなのだ。

やがて教練の終了日が近づいたある日、トシアキは「子捨ての淵」に立ってその渦の至る先を見つめていた。

今では小ゲートと呼ばれる空間の歪み。これはいつどこに現れるか予見できる人間は世界に数えるほどしかない。

ある日、前触れもなく現れた小ゲートの報告を受けると王の顔色が青ざめた。

「国王陛下！ いえ皇上、おやめください！！」

父の腕に抱かれているのは、兄とは対照的に病弱な子だった弟のシモンキン。

第一王子誕生の際に、エスタリアく緑深き妖精たちの国くから贈られた祝いの品がある。

『シモン、今日からはこれを着ている』

緑生い茂る森の王国のエルフたちの髪を織って作られた反物。いつも風邪を引きやすい弟に、兄は癒しの加護を与える外套に仕立てられたローブを譲った。

『それでは兄者のマントが』

気が引けている弟に兄は、ツヅラから別の反物を取り出してみせた。

『エルフの紡ぐ糸には癒しの魔力があるそうだが、おれはこっちの戦闘用ローブでいい』

クルスベルグの鍛冶屋たちの鍛冶屋たちによる鍛冶屋たちのための国々の住人であるドワーフたちのなぜか鍛冶職人たちの手による頑丈一点張りのローブがそこにあった。

エルフのマントに包まれたシモンキンは今まさに、子捨ての淵に投げ捨てられようとしている。

「なぜですか！ 母上の進言で子殺しはやめたではないですか！？」

シモンキンはまだ8歳だ。兄は王と長老と近衛の前に単騎立ちはだかる。手はシュヴァリア兵の刀、マシエーテの柄を握って。

（急いで！ シモンを救うのよ！！）

教練の最終試験である素手による熊狩りを終えた直後に、テレパシーで母の言葉が届いた。教官の馬を奪う。初めての命令違反だった。

父は息子の反乱にも怒った様子は見せない。

「シモンは元来、育てることができないはずだった子どもだ」

「だから、それは母上が……みんなそれがいいと、変えた方がいいと言ったではないですか」

「内心では快く思っていない者も多いのだ。国の伝統を壊す行いだからな」

長老会が母妃を疎ましく思っているのは年若いトシアキにも想像ができた。そもそも王が誰かの意見を聞き入れて、国の制度を変えらるということ自体が異例なことであり、祖父王はその厳しさで二人

の王子のうち一人を、父の兄を死なせたのだという。

母はこの国の特異点だった。トシアキの父も歴代の王の中では、兄の死を引きずるナイーブな部分があったのかもしれない。

父王はそれゆえに妃の言葉に従った。長老会はそれを王が妃に屈したと受け止めたのだ。王に対して全権を握る、異界から来た妃を憎んでいる。王が長老会をうらぎったと陰口も広まる。そのために政権運営に幾度か彼らの協力を得られず、王は苦心していたのであった。

夫の苦境を見ても、妃は妥協をしなかった。妃の救いの手は、シユヴァリアの外にも向けられる。

福祉も社会保障もない国々が多く、子どもたちは腹をすかせばるまどっていることも多くあった。

だが彼女は妥協しない。

そこで長老会は王に一つの条件を提示した。

「妃は第二王子シモンキン可愛さに子殺しの掟を曲げた」

「それはちがう」と王は反論を試みたが、長老の妥協を取りつけるためには私心が無いことを証明しなくてはならなかった。

こうしてシユヴァリア最後の子殺しが行われようとしている。

弟、シモンキンを救いだせるのは遠く離れたところにいる兄だけ。

だがそれについては、妃は何も知らされていなかったのだが、テレパシーは翻って他者の心を読み取る能力でもある。

長老の企てを知った母は、長男に語りかける。

王宮で妃と向き合った長老の一人は慇懃に頭を下げ、その傍らを横切ろうとした。彼女がその心をトレースしていることに気づかず、彼女を底なしの絶望に突き落としたのだった。

兄は父による子殺しの寸前に間に合い、駆けつけることができた。

トシアキもまた、もはや希望が何一つなくなっても一瞬たりとも妥協しようとは思わない。

「トシアキ、王がいなければ国は立ち行かん。そして信頼と尊敬を失えば、その者は王足り得ない。シモンは無駄死にはない。崇高な犠牲なのだ」

憐れな弟。王の子にさえ生まれなければ、いまのシュヴァリアなら病弱さえも咎められずに済んだのに。

(まだ、八歳なのに……)

父の腕に抱かれた枯れ木のような手足、その目は自分の運命を悟ったように、諦観にとらわれている。

「シモンは母の子。第二王子である前におれの弟。弟を殺す者なら、王と長老会であろうと、この兄が殺す！」

「王子、ご乱心か！」

長老たちが取り乱した様子を見せ、その中で王のみが、平静な眼差しを息子に見せていた。

「トシアキ、これは王族の運命だ。命より国家への貢献を民に求める以上、己が命を惜しんではならん」

王はシモンを地に下ろした。

「父上？」

何をするつもりなのか、トシアキはいぶかしんだ。

息子と同様に腰へ吊るした山刀を抜く。

トシアキは息を？んだ。

(いよいよ、父と剣を交えるのか)

命知らずのシュヴァリア戦士であっても、王の剣に対する畏怖の念を捨て去ることはできない。

先刻の熊狩りに倣い、トシアキは腰を落とし膝を曲げ、踵を浮かせるように「猫足立」の構えをとる。刀は胸の前で柄を短く握り、どの方角への攻撃も防御も瞬時に対応できる姿勢だ。

熊の爪刀もかいくぐり、背後をとるトシアキですが、戦士の中の戦士、父王は熊の力など軽く凌駕することを知っている。

トシアキは青銅の剣を携え、弟のシモンを血と暴力の国から引き離し、どこかこの世の遠くにある甘い果樹園に連れて行かなければならない。

母は言った。

「国家にも人格がある。子捨ての痛みが、国を成長させはしない。子どもを解放するよう王が言い渡さなければ、シュバリアの民が神々の栄光に近づくことはないであろう」

トシアキは微笑んで、その言葉に聞き従っていた。

「トシアキ、王妃の言葉は毒の林檎と長老会は考えている。おまえもそれを耳にして毒されたようだな」

「母を侮辱するなど、父上らしくもない」

「王には逃れられぬ宿命がある」

父の手から王子のもと同じ形の山刀・マシエーテが離れる。それは王の足下の大地に突き立った。

(?)

「戦士の長である王が刀を捨てることなど有り得ない。」

「その宿命を背負う覚悟があるか」

「覚悟とは？」

「本当に父を殺す覚悟はあるか？」

「シモンキンの命を賭けての決闘ならば、受けて立つ所存」

緊張に、ギリッと奥歯を噛み締める音が鳴る。

第三・五章 了

「ならば、父を殺せ。父を殺せば、おまえが王ぞ。そして長老会も皆殺しにするのだ。己の意思に逆らう者を肅正する力を王は持つ」

長老たちの中には、すでにこの場を去ろうときびすを返す者もいた。

「覚悟さえ示せば、残された臣下の者たちは年若かろうと王に従う。政権を奪い、母の言う『神に祝福を受ける国』へシモンと民を連れて行くといい」

両腕を広げ、無防備な心臓を晒して王は、トシアキに一步また一步と近づいていく。

王の威厳は、若き王子を圧倒するものであった。無意識にたじろいだ足が、一步二歩と後退してしまふ。

踵が小石を蹴った。コロコロと音を立てて、谷を落ちるようにゲートへ吸い込まれていく。

トシアキは「子捨ての淵」に立ってその渦の至る先を見つめた。

今では小ゲートと呼ばれる空間の歪み。これがいつどこに現れるか予見できる人間は世界に数えるほどしかない。

ここに弟が放り込まれたらどこへ行くのか。

(全ての人間はすべからく神々に対して畏敬の念を払わねばならぬ)

「母よ、加護をください」

（神に名はなく、なぜなら世界を支配する神とは愛に他ならない。愛を指導者とする戦いで栄光を勝ち取るには、慈悲に不服従であつてはならぬ）

トシアキは念仏か呪文のように母の言葉を唱え続けた。自らの勇気を奮い立たせるために。

（愛に不服従なる人は全て神を憎む人々である）

愛の名の下に神と和解するなら、血に手を汚した戦士であれ、わたしたちはそれぞれ自らの愛の対象を手に入れる。この世に幸福があるならば、それはこうした状態に限りなく近づくこと。

父が剣を捨てたのと同じように、トシアキも腰の鞘にマシエーテを収めた。

「弟を捧げる覚悟が出来たか」

父は息子の剣に刺し貫かれることを期待していたのか、悲しげな目をしている。

「王は国を、民を守るために少数を殺す」

王がかつて息子に帝王学を語ったときの言葉を、トシアキは口にした。

「王は国を民を守るために己が命を惜しんではならない」

父と子、王と兵士が、互いに徒手空拳で正面から向き合う。

この世にあつては、王は自らが座する場所からすべてが成し遂げられることを見渡すことが仕事であるのかもしれない。

家族を第一に愛することが許されるのは王と異なる世界、すなわち平民市民においてのみなのである。王は愛を国家の前に置くことは許されていない。

愛することができるのは、即ちもうひとつの世界に属するよう定められた魂だけである。

トシアキが玉座へ至るにしては、完全に純粹で完全に無垢で完全に勇敢なる者だった。

悪魔は死なせるべき人間たちに対して、その高い希望から奈落の底に突き落とすように諮るといふ。

「王よ、父上とシモンの二者択一と言われたが、おれはどちらも捨てる気はありませぬ」

王子はそれに抗い、もうひとつの世界に生まれることなく不幸な運命の下にある、罪人とされた弟を守ろうと死地に赴くことも厭わない。

「分別をなくしているようですが、シモンはあなたにとって大切な王子です。今日この日より、シュヴァリアの王子はシモンキンただ一人のみ！」

それが王の息子、トシアキ・デスプルフ・シュヴァルツの声を、
シュヴァリアの民が聞いた最後だった。

第三・五章 了（後書き）

さて、第三・五章が終わりました。

朝起きたら、たくさんポイントが入っているのを期待して寝まゝす。

ノシ

壁――・））） ササッ

壁――）） 3

壁
：

次から第四章に入ります。

異世界人はつらいよ 編です。

第四章 あらかじめ失われた玉座の王子

トシアキは身を翻し、背後にあった子捨ての淵へ自ら飛び降りた。

はるか頭上から王と長老が、彼を呼ぶ声が聞こえたが、振り返る余裕は無かった。

この時空の歪みの果てに何があるのか、これまで落とされた多くの赤子たちがどこへ行ってしまったのか、それを確かめるのも王の務めなのかもしれない。

そう考えると、不思議にこのまま命を落としたとしても、決して恐れることはないのだという境地に達することができた。

「兄者！」

「シモン、立派な王になれよ！」

トシアキの身体は螺旋を描きながら、ゲートを落下していく。その先がどこへつながっているのか、かつて母が通った道と言うから母の故郷につながっていることを願うしかない。もちろん、いつも同じ場所につながるとは限らないのが、この異空間ゲートだ。

「この道をいけばどうなるものか。危ぶむなかれ、危ぶめば道はなし」

「母上？」

またも、ダイレクトヴォイスがトシアキの脳裏に響いた。母の言

葉は次元まで超えて届くらしい。

「踏み出せばその一步が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ、行けばわかるさ」

落下速度はますます加速していく。

「このままでは！」

トシアキの装束は革のショートパンツに膝下の防具。上半身は、裸の上にクルスベルグの鍛冶屋たちの鍛冶屋たちによる鍛冶屋たちのための国々の住人であるドワーフたちの鍛冶職人たちの手による頑丈一点張りのマントを羽織るのみだった。これもまた法術を施した魔布。たなびくマントが形を変えて、トシアキの肩から鳥の翼のようにはためく。

これにより落下速度が減速される。

「息子よ、一足先に母の故郷に帰りなさい。

あなたは胸の内に勇氣と子どもの心を持っているのだから、むやみに感情を高ぶらせすぎてはなりません。

不死なる戦士たちのうちにあっても、不名誉な王子と後ろ指を指されることなどないのだから。

あなたは、父上と同じ生まれの誇り高き戦士。

あなたはいずれ、生きとし生けるもの、そして死にゆくものすべての君主となるでしょう。

不屈なるシュヴァリア人の中でも至高の榮譽をもつに相応しい子ども」

やがて母の言葉が途切れる頃に、トシアキは新しい地平の光を見た。

最初に「光りあれ」と神は言った。

そこは光の明滅が激しい昼の谷間だった。

「『光あれ』ってレベルじゃねーぞ」

もとより昼間のように、陽の光はシュヴァリアの大地と変わらぬ光量が注がれているが、部分的な光の投射が見慣れぬものであった。

おれは石岩山の谷間にいるのかと思ったが、よくみれば路の両脇を囲むのは人口の建築物の壁であるようだった。

これほど隙間無く背の高い家屋を並べる習慣は、わが国にない。

石畳は隙間無く、凹凸や段差の少ない手のこんだ物だった。

「石だけでなく、ところどころ柔い。土が見えないな」

落ちるようにゲートに飲み込まれたが、吐き出されたときは水平の力が加わった。落下していたつもりが、いつの間にか水平移動していたようだ。平衡感覚が狂いそうになり、ぐるぐると前転しながら、気づけば時空の歪みが消えかかっていた。

おれの背後に人ばかり。みな珍しそうにゲートの奥を覗いている。

わずかな時間でゲートは縮小し、やがて空気のゆらめきとなって見えなくなってしまうた。

「人族の国のようだな」

ゲートを見たことがないのだろう。みな、顔を見合わせて首を傾げている。

数歩歩くごとに、やけに柱が多い。通りの頭上をワイヤーが縦横無尽に這う。商家が多く、ひっきりなしに住居から人が出入りしている。

ある程度の文化を持つ集落であることは一見してわかる。

「交易都市であるのかな」

ビヨンドで有名な商業都市と言えば、ラ・ムール（太陽神を信仰する猫人達の国）だ。実際に訪れたことはないのですが、これは学舎で習っただけの知識なのだが。

やがて衆目の関心は次元の歪みから、おれの方へ移った。行き交う男女が、じろじろとおれの方を見ている。

「無礼な奴らめ」

異民族たちは、男女とも同じような服装でいるのが奇異に思える。ビヨンドでも、他の国の民は男も衣装を着込んでいるから、おかし

いとまでは言わないが、それにしても男より女の方が肌の露出が多いのはどういうことか。

シュヴァリアの女性も周辺国の婦人たちに比べれば軽装だが、それは強力な軍隊と男たちの筋肉の壁に守られているからであって、郊外に住む集落の女性たちは、獣に襲われたときに備えた丈夫な野良着に身を包んでいる。

この場で上半身が裸の男はおれだけで、それゆえに彼らはおれを指差している。下半身は短いスカートに生脚の女性も数多くいて、むしろおれの出で立ちに近いものがある。

それにしても……

「話かけるでもなく、にやにやと気色の悪い連中め」

彼らは遠巻きにおれを見ながら、仲間同士でなにやらひそひそ話をしている。

「ヤダー、ハダカジャナイ」

「ナニ、アノコ。マントナンカハオツテ、コスプレ？」

彼らがそろって同じ姿勢でおれに向かう。腰をやや落とし、右腕を突き出す。彼らはおれでなく、一様に手にした機械のようなものを見つめていた。

「む？」

なにか戦士の直感がおれに警告を発していた。

ピローン

機械音がするや、おれは地面を転がって男の間合いから逃れた。

「おれを狙っている？」

弓や小刀には見えないが、その機械がおれを標的にしているのは間違いない。

時折、環衆のクスクスと忍び笑う声も聞こえる。

ピャラーン

さらに背後から電子音。後方へ宙返りしつつ、射線から飛びのいた。

「おおー」

なにやら、称賛するらしき声も聞こえて拍手が起きた。

「ヨーツーベー……」

なおも食い下がるようにおれに機械を向ける男の掌中から、それを奪い取った。

「いいげんにしろっつーの」

握ってみると力を入れれば真つ二つに壊れてしまいそうな、華奢な道具だった。使い道がわからない。と、そのとき。

いまであれば着信メロディなどに驚いたりはしないのだが、不意に流れる音楽に驚いておれは携帯電話を取り落してしまった。

ガシャン。カラカラ。

二つ折りタイプの赤い携帯電話は力なく路上を滑った。電池カバーがはずれて、バッテリーもあらぬ方向へ転がった。

なんとも間抜けな姿だ。どうやら危険なものでもないらしい。

「……………」

「……………」

周囲の嘲笑も止んだ。

「ナニスンダテメー」

おれに携帯電話を壊された男が胸倉をつかもうとして、手が泳いだ。上半身裸のためにシャツの襟をつかむようにいかない。少し迷って、マントの端を握った。

戦闘能力の低い町人だと一目でわかったので、殴り倒すのは少しの間保留した。

それより周囲の風景におれは関心を奪われた。男が顔を近づけて、「ガン」をつけてきたので、手首を軽くひねると男は地面に膝をついた。

「うまそうな匂いがするな」

おそらくここは母の国だろうと思った。耳が慣れて、道行く人間の言葉が、片言なら聞き取れるようになってきた。

おれの嗅覚はそここの飲食店から漂ってくる食べ物の匂いをかき取っていた。

「空気にも混ざりものが、たき火でもしているのか」

排気ガスの正体がわからない間は漠と不快に感じた。

通りの向こうの軒先に、父子がいた。カフェの軒先はドリンクとアイスクリームの販売コーナーになっていて、父がなにか注文している足下で、女の子が野良猫をかまっている。

「猫もいるのか」などと考えていると、店先の父親がソフトクリームをカウンターで受け取っていた。子どもから視線が反れている。

そのとき、歩道に寝転がって子どもに腹を見せていた猫のしっぽが、通行人の男に踏まれた。

ウウギャー。悲鳴を上げ、道路に飛び出した野良猫。

そのまま走り抜けていれば良かったのだが、まさにその刹那、一台のセダン車が車道を駆けた。迫り来る車を見てしまった猫は、車線を横切る横断歩道の真ん中で立ちすくみ、金縛りにあう。

信号は青信号。運転手にも落ち度は無かった。それだけに一瞬の出来事に運転手は猫の存在を知覚さえできなかった。

「だめ、ネコちゃん！」

子どもも、猫が車道へ飛び出したのと同時にその後を追っていた。女の子が固まった猫を抱きあげ、運転手がはっと目を見開く。彼の心臓が縮み上がったことだろう。

急ブレーキを踏むも、その距離わずか1メートルに満たない。

スローモーションで、周囲の情景が流れる。

異変に気づき、アイスクリームを取り落とした父親が腰を曲げた。

我が子を救わんと、駆け出そうとする。勘定を終えた、別の客が店から出て来た。大学生だろうが、右手を上げて、少女を指差するのが精一杯だった。

キキキキキキキキー！！！！！！

長いブレーキ音が、父の眼前を過ぎていく。

黒いセダン車は横断歩道を通り抜け、少女のいた位置から10メートル先の地点で停止していた。

「あ、あわわわわ」

運転手が腰を抜かしたまま、車から降りて来た。定年を迎えた前後に見える初老の男だった。

やがて、往来に人が集まって来る。みな、同じく一点を注視していた。それは道路にぶちまけられた血の海ではなく、横たわる少女と猫の痛ましい姿でもなかった。

通行人の視線の先にあるもの。みな、ぽかんと口を開けて、ある上空の一点を見つめていた。

地上から5メートル。車道用信号機におれは右腕一本でつかまっていた。左腕には少女を抱え、彼女は猫を抱いている。

少女が車にはねられる瞬間、父親は目をつぶった。

ドシンという車の前部が爆ぜる音が彼の鼓膜に響いた。

「ひいっいいい」おそろおそろ目を開けて見たのが、いまの光景だった。

「いまの見た？」

「え？ ううん。どうなったの？」

通行人の声がする。

子どもが車道に飛び出した瞬間、手前の女子高生の携帯電話だけがおれの視界の隅で、虚空に浮いていた。

スローモーションで展開する交通事故の再現映像の中、おれだけが他者とは異なる時間軸を移動していた。

子どもを追って、ダッシュで駆け出した。セダン車との距離30センチの地点で、しゃがみこむ少女の背に覆いかぶさる。

脇から手を回され、児童の体が宙に浮く。

両足で第一のジャンプ、高さではなく瞬発力を優先し、セダン車の前面グリルを飛び越えた。第二のジャンプで、おれの右足が車の

ボンネットに陥没を生じる。その蹴りは、車のエンジンをも破壊するほどのものだった。

常人からすれば驚異的と呼べるだろう跳躍力で、空めがけて飛び上がったおれの足の下をセダン車の天井が通過していく。

信号機のアームが近づく。女の子の体から右手をはなし、信号機を支える鉄柱をつかんだ。ふたたびおれの体に地球からの引力の支配が及ぶ。

ざわざわ。往来の人間たちが集まって来た。おれの跳躍を目撃した人間は数人いたようだが、それらの人々は、自分の目を疑って目尻をおさえたり、頭を振ってまばたきしたりしていた。

ぞろぞろと集まって来るのは、なにが起きたのかもわからない野次馬ばかり。

「なんだ、なんだ？」

「事故か？」

「え、どうしてあんな高いところに子どもが？」

口々に当然の疑問を口にする。

「サツキ！ サツキ！！ 無事か！？」

父親がようやく目を開ける。我が子の姿を求めて、左右に首を振っている。

「誰か下に行ったほうがいいんじゃないか？ 子どもをおろさない
と」

「早くしろ！」

数人の野次馬がおれの真下へやって来た。

（なるほど、この少女を助ける手伝いをしようとしているのだな）

「ど、どうするの？」

「きみ、わたしたちが受け止めるから合図をしたら手を離すんだ！」

このときのおれは、彼らの言葉をすべて理解することはできな
かった。

「子どもを受け止めるから！ 大人にまかせる！」

（とにかく、子どもをおろせと言っているようだ）

地上では、スーツを脱いで子どもを受け止めようとする男たちの
円陣が組まれた。

（あの鉄の箱の背に降りればいいのだな）

おれは左手の力を抜いた。ゆらっと、落下するおれの体。まだ準
備ができていなかったのか、悲鳴を上げる大人たち。

「きゃー」

思わず、女の子も悲鳴を上げる。

「おおっと!!」

予想外に鉄板は柔く、おれと少女の体重を受け止めて、ズムツツと天井がひしゃげた。窓ガラスに無数のひびが入り、車内が見えなくなるほど。

少女の身体をかばって着地したおれは姿勢をくずして、車体から転げ落ちた。ボンネットをつたって、アスファルトの地面に背中を打ちつけた。

「痛ええ」

彼女はどこにも、打ち身など作っていないはずだ。

おれは立ち上がりもう一度、自動車を観察した。

(これは牛車か馬車か？ それにしては牛も馬もない)

自走する籠のようなものか、人足でも中に入っているのかと思えば、それも違うようだ。

鉄の塊かと思えば、内部は空洞も多い。叩いてみた手ごたえからして無数の部品から組み立てられた機械であるようだ。

先ほどの子どもが、おれの腕をしつかとつかんでいる。

「ふえーん」小刻みに震えて、か細い声で泣いている。

こんなものにぶつかられては、成人であれば当たり所によって死を免れることもあるだろうが、この小さな体ではひとたまりもないように思えた。とっさに助けに入ったことは間違いではなかっただろう。

おれは興味深く自動車を観察していた。見たところ、車線はこの自動車と歩行者がそれぞれ進み道を分けているのだと理解する。

歩道にもどったおれにみんなの注目が集まるが、誰も言葉をかけない。声をかけられないと言った方が正解だろう。

「サツキ!」

父親が叫びながら女の子に駆け寄った。

「怪我はない!? どこか痛くないか!」

彼女はこくこくとうなづいている。懐には猫を抱えたまま、顔面は蒼白になっている。

「はつつあぁ」

父親は声にならない嗚咽をもらした。そのまま力の入らない手で、ぼかぼかと子どもの体を叩き続けている。

父親は落ち着きをとりもどしきれてはいないが、やや冷静になってからおれの方に向き直った。

「%# (((%) { } | > ¥ > “ ……」

英検4級程度の英語力でも幼児の言葉ぐらいは聞き取れるというが、早口でまくしたてられると、父親がなにを言っているのかさっぱりわからない。

5分も経つころには、彼もすっかり平静を取り戻したようだ。感謝のまなざしでいたものが、だんだん不審げに変わっていくのがわかる。

このときのおれは、「半裸ですがなにか?」というぐらいのもの

だったが、いまでは珍妙ないでたちでいたことが理解できる。

そうこうしていると、ほかの衆目とは異なる鋭い視線がおれに向けられているのに気付いた。

上から下まで紺色のおそらくは軍服を着た二人の男が、人の群れを縫って現れた。

「ちょっと話を聞かせてもらおうか」

おれは警察に補導された。

事故の現場検証をしている間、おれはパトカーに乗せられていた。セダン車の持ち主や通行人から巡査が目撃証言の聞き取りをしている。

(なるほど。鉄の籠の中はこうなっているのか、意外と座り心地がいいぞ)

何人かは車中のおれを覗き込んだりもしていた。

「……………署へ……………移すぞ……………」

相変わらず、この国の人間の言葉を完全には聞き取れない。はじめて外国旅行をするようなものだから、いたし方あるまい。

警察官がなにやらレバーを引つ張ったり、肩を揺らしている。ハンドルを回すと車は方向を変えながら、車道に進みだした。

おれは籠がどうやって動いているのか不思議だった。もしかして前の席に座る二人と隣の席の男が下で足を動かしているのかと思っただが、べつにそんなことはなかったぜ。

やれやれ、おれは取調室に座らされた。

マントは取り上げられなかったが、上半身裸のおれは具足を外され、ジャージの上下を貸し出された。青いフードのついている、ニユースでよく見る「あれ」。

「きみ、なまえは？」

「トシアキ・シュヴァルツ、トシアキ・デスプルフ・シュヴァルツ」

「どしはいくつだ？」

「うん？ もう一度名前を尋ねたのか？」

「トシアキ・デスプルフ・シュヴァルツ」

「はあ？」

「いえはどこだ？ でんわばんごうは？ けいたいでんわはもってるか」

「イエ・シュバリエ……デンワ？ ケイタイ？ ワカラナイノコト」

「がいこくじんか……」

現場検証でいろいろおかしな目撃証言が集まったらしく、警察官も半信半疑でいろいろ尋ねてきたが、言葉が通じないとわかると、返答を急いでくることもなくなった。

所在無げにおれは、警察署の片隅に置かれたソファに座っていた。無言でいたが、おれは目に映るものすべてが目新しく、退屈はしなかった。

（ここは町の治安を司る管理の詰所であるようだ）

ワケあり顔の民間人を伴って警察官が行ったり来たり。

軍の駐屯所より臨場感があるといえよう。平時においては、軍人の生活は静かで単調なものだ。

軍の敷地で聞こえる声といえば、訓練の号令ばかりだが。ここでは官吏と民間人が大きな声で怒声を浴びせあっている。

（オラ、わくわくしてきたぞ）

窓から西日が差しこむようになった頃、一人の女性警察官が声をかけてきた。

「きみ、おなかすいていない？ わかる？」

彼女は、おわんから食べ物を口に運ぶジェスチャーをしてみせた。

（食事をどうするか尋ねているのだな。ほしいと思ったら、くれるのだろうか）

場所を移して落ち着いて食事をとれる部屋に案内してくれた。白衣を着た若い男が配膳用の金属ケースから陶器の器を取り出した。

ふたをあける。ふわっと湯気が立ち上った。シユヴァリアでは、米食よりジャガイモを食することの方が多し。寄宿舎の食事では大きなパンが配られ、グループごとにそれを手でちぎって分けて食べる。

スプーンもフォークもないが、チョップスティックの使い方は知っていた。海洋国ミズハミシマの食事は箸で行われる。使い慣れな

いと握るのが難しい。

目の前には女性警察官がいる。おれは王族のメンツもあって、一粒のコメも落とさぬように、細心の注意を払って米を口に運んだ。

(それにしても……)

「かつ井おいしい？」

女性警察官が声をかける。

「カッドンマイウー」

6 (後書き)

劇中劇と見せかけて過去編なんですがもうすぐ終わります。
次章はリイナ姫が再登場します。

かつ井にはおもに卵とじとソースかつ井があるが、いま食べているのはふわっとしたころもにあまじょっぱいソースがかけられたものだった。これは精がつきそうだ。

(これを毎日食べさせれば、シモンキンもたくましい身体になるのではないだろうか)

故郷に残してきた弟が気がかりだった。

第一王子の出奔はどう処理されたろう。自死したと思われたか、あるいは事故として処理されたのだろうか。いずれにせよ、第一王子亡き後に、あえて唯一の王子であるシモンを手にかけることなどもうないだろう。

外見からすると、この世界の小学6年生か中学に入りたての年齢に見えるおれを、いつまでも警察署に留め置くわけにはいかない。

はぐれたか、家出したか、いずれにせよ写真を撮影するのは、登録外国人や旅行者の中から身元を洗うためのものだろう。

その晩はなにやら、わけありの児童が生活する施設に身柄が移された。他の児童に紹介されるでもなく、個室で夜を明かした。

ベッドの中で、今後の身の振り方を考える。

「おれは、子捨ての淵に落とされた子どもたちを探さなくてはいけないのではないだろうか」

自分が生きているのだから、どうやらかつてゲートを通った幼子たちも生きている可能性が高い。彼ら彼女らの行方を探すことは、元・王子の義務であるように思えた。

(とはいっても追放されたから、もう王子でもないのだけれど)

最後の子捨てが行われたのは、おれが生まれる2年も前のこと。彼ら彼女らが生きているならば、一番若い子どもでも14歳は超えているだろう。長らく行われた悪習であるから、壮年や老齢のシュヴァリア人も存命かもしれない。

(しかし、どうやって探せばいいのか?)

この世界のことを明日から学ばなければならないだろう。母の故郷の、シュヴァリア人にとっては少しぬるく思えるこの世界を。

137

翌日、少年用の衣類を施設に努める女性が貸し出してくれた。いまの恰好はあまりにもあまりだろうと、警察官に文句を言っていた。昨日おれが来ていた服は事件の容疑者が着るためのものだったらしい。

多くの子どもが暮らす施設のようだったが、朝になるとみんな門の外へ鞆をかついで出て行った。月曜日だから学校へ行ったのだ。素性の知れぬおれを子どもたちに接触させるのははばかれたのか、おれは部屋の窓から子どもたちの背中を見送った。

この世界の子どもたちがどんな生活をしているのかは、この時点ではまだ知らない。

施設の職員から口の中を見られたり、身長と体重を測られたり、
かたんな身体検査を受けたりして過ごしていた。

自由になると、幾冊かの本やテレビを見ることを許された。テレビは昨日の自動車に続く驚きだった。異世界人が現代文明に触れた時の驚きは長々描かなくても、みなもろもろのファンタジー小説でよく知っているだろう。あれをおれは体験したわけである。

さすがに小人が箱の中に入っているのかとは思わなかった。それに母がテレパシストだったこともあって、これがなにかテレパシーの受像機かなにかなのかと推察したりもした。

いまの液晶テレビは箱型というには、あまりにも薄すぎだからそんなことも考える余地はないだろうが、このころはまだ液晶テレビが普及していなかった。

夕刻に、昨日見かけた人物が現れた。子どもは連れていなかった。

「きみはどこかべつのくにからきたのだそうだね」

おれはうなずいた。

「ことばはわかるかね」

「ホンノスコシノコトナラ」

「ごりょうしんがみつからないとか、ふあんだらうっね」

おれは首を振った。

「チガウヨ、クニカラトウボウシテキタノコトネ」

男性はぎょつとした顔をした。たいそう驚いている。

「もしかしてきみはなんみんなのか？」

「ナンミン？ ナンノコトネ」

「いや、なんみんなというのはだね。くにがせんそうをしていく

みんなにげてきたとかかえるいえがなくなったひとのことだよ」

それならわかる。おれは難民ということになるのだろう。

「センソウハイツモシテルネ、ベツニメズラシイコトジャナイノコトヨ」

母が女性言葉で話していたせいで、おれの日本語もどこがおかしなイントネーションだ。

「にほんごはだれにおそわったんだい？」

「カーチャンガコノクニノヒトダカラ、コトバヲナラッタコトアルヨ」

難民という言葉の深刻な意味を、おれは理解していなかった。紳士の顔はみるみる蒼くなっていく。

「モウカエルイエモナイヨ」

「これはたいへんだ、これはたいへんなことだ」

なにか深刻そうに考えこんでいる。

（なんだろう。このおじさん、なにか悩み事でもあるのだろうか）

「ソウイエバ、コドモハゲンキデスカ？」

「ああ、そのせつはありがとう。きみがいなければむすめはどうなっていたか、きみはいのちのおんじんだ」

(よくわからないが、感謝されてるようだな)

手応えからして、あの女の子には怪我をさせていないと思っていたが、無事だなによりだった。

「……………」

「…………よし、きめた」

彼は向き直って、おれに言った。

「わたしのうちにきなさい。きみのせいかつはわたしがめんどうみよ」

これがおれのこの世界での家族となる、双葉親娘との出会いだった。

察しの良い読者諸兄のことだから、そろそろわかってしまったと思うが、つまりおれ双葉としあきは、もともとゲート内世界ビヨンドで生まれた人間なのである。

テレビで放送されている「シュヴァリエ!」もそのころの思い出に、おれから聞いた故郷の話をストックがイメージーションを膨らませて小説にしたものだ。

「なつかしいな」

「うーむ」

いいかげんおれたちも服を着た。

「あのころは、兄さんも言葉がたどたどしくてどこの国の人だろう
と思ったわ」

「片言でも喋れて助かった。母さんのおかげだな」

双葉氏に連れられて、おれは施設からマンションに移った。思い
がけぬ来客に9歳のサツキは目を丸くしていた。

着の身着のままだったので、衣類や日常に必要なものを買ひ揃え
たり散在させてしまったが、すぐに双葉親子がかなり裕福な家庭だ
ということに気づいた。

おれは少しづつ高度文明社会の生活になじんでいく。

サツキには母がいなかった。彼女が幼いころに離婚したのだそう
だ。

父が仕事の間は、家事をしてくれる人間が数時間訪ねてきたが、
一人でいる時間が多いサツキはすぐおれになついた。

後から考えると、難民なのはいいとしてこの世界には存在しない
国の住人であるこのおれが、よく日本国籍を取得できたものだ。学
校への編入など、なに不自由ない生活がすぐに用意された。

どうしてそんなに手回しがいいのか、双葉氏がなにか特別な権力
でも持っているのか、その理由がわかるのは数年後のことだった。

おれは一般的な中学生の年齢にしては落ち着いて従順だったため
か、双葉氏に気に入られた。ほどなく養子縁組をして双葉氏はおれ
の義父になった。おれの名前もトシアキ・シュヴァルツから日本風
の名前に変わった。トシアキという名前はこの国でも珍しい響きで
はないようだ。サツキには学校の勉強を教わるなど情けない限りだ
ったが、彼女はおれを兄として慕ってくれた。

一般常識のないおれが一人で出歩くと、たいがいなんらかのトラ
ブルを引き起こすので、サツキはどこへ行くにもおれの後について
歩くようになる。

この世界のルールはテレビとサツキから学んだ。

最初はとんちんかんなことばかりして、学校でからかわれることもあったがいじめに発展することはなかった。素手で熊を倒すシュヴァリア戦士と喧嘩をして勝てる児童生徒はいなかったからだ。

最初の頃は、ちよっかいを出してくる生徒になんの疑問も抱かず喧嘩を買っていたが、この国の子どもは軍事教練を受けてはいないことを知って、自重した。

歯を折ったり複雑骨折や内蔵にダメージのないように、加減していたつもりだが、それでも学校では大問題になり、相手の親は泣きながら怒り狂うし、双葉氏も呼び出されて平身低頭だった。

「これが母上の言っていた『人権』か」

シュヴァリアでは教練での人死にが問題になることなどなかった。

おれが痛めつけた生徒たちも他の弱い子どもから金品を恐喝したり、暴力を振るっていたから子どもの世界は無法なのだと思っていたが、そうでもないようだ。

おれは自分から喧嘩を吹っ掛けるようなことはしなかったので、やがて中学校では番長として扱われるようになった。

他校の生徒とのトラブルも相談されるようになるが、力による支そんなつもり配はないだがが功を奏して吉祥寺周辺の学校は平和になっていった。

それでも言葉が拙いことをからかわれることはまだまだあったので、おれは猛勉強をした。早く一般の生徒の学力に追いつかないと。

そうこうしているうちに、おれは学業でも目立つようになった。

言葉がわかれば、異世界の学問であつても、理解することは不可能でない。

この世界の歴史は、これからビヨンドの国々がどんな発展を遂げていくのかを予言されているようで衝撃的だった。もどれることがあるかわからないが、関数という概念などもシユヴァリアでは一部の学者しか知らないような内容を無償で一般人に教えてくれるのだから、この国の教育環境は非常に恵まれていると思う。

#9 (後書き)

わたしへのクリスマスプレゼントは評価点でお願いします。

第四章 了

学問の価値を知るものと知らないものでは熱意に差が出るから、おれは成績も上位になって高校に入学後は生徒会に推された。

おれが来る前から双葉家の生活は変わっていて、朝はおれが通学途中にサツキを小学校へ送っていくのだが、帰りは時間が遅くなるので父の部下らしき女性が迎えに来て、家事や夕食なども作ってくれた。

おれが来る以前は、朝もだれかしら迎えが来ていたらしい。

父は商社を経営していた。日本でも有数の会社の経営陣の一人だった。そうだったプライベートな用事まで頼んでいいのだろうか、と疑問に思うこともある。

「ああ。しかし登場人物を実名にしてしまつて大丈夫だつたらうか」

作者である宵闇心音のプロフィールは謎になっているから、これがおれたちの物語だということを知る人間はないの……だが？

「シュヴァリエ！」のテレビ放送が終わった。

「さて、ネットでの評判をみてみましょうか」

「ドキドキするな」

おれたちはPCの前に座った。「シュヴァリエ！」でネット検

索してみる。

いくつかあるアニメ批評サイトの中から一番上位に表示されたサイトを開いてみた。

『いまのアニメひどかったね……』

がくつ。おれたちは肩を落とした。

それから数日後の3月某日、あるマンションの一室にて。

中学校入学を間近に控えた少女が、受け取ったばかりの制服に袖を通し姿見の前に立っていると、母親が慌ただしく部屋に入ってきた。

「ちよつ、ちよつと、ベランダに来なさい。すごい物が見えるわよ」

「すごいもの？ なによ、母さん」

広い部屋ではない。母親に背中を押され、キッチンに入ると窓の外から鮮やかな光が見えた。

「へえー。こんな季節外れに花火なんかやってるんだ」

もう八時も過ぎた。周辺でこれほど目立つ照明を掲げる建物はないはずだし、角度が高すぎる。

駅の方角ともちよつと違う。

「なに言ってるの、よく見なさい」

「なに、あの光？」

東の空にひととき強い光を放つ星があった。

「へんね、あんな星座は……」

そう言ってる間にも星は輝きを増し、大きくなっていく。

「え、まさか流れ星？」

少女が驚くのも無理はない。母が既に開け放していたガラス戸から物干し台へ出ると、長い尾を引くほつき星が武蔵野の空から都心へ向かって流れていくところだった。

「ね、ね？ すごいでしょ」

「うわー……」

絶句して、しばらく声も出ない。

それもそのはず。

10月の風はなまぬるく娘の顔をなめた。空は4割の曇り空。

「きつと日本中が大騒ぎよ。お父さんに電話かけてみよっか」

母は大はしゃぎだった。

今夜の天気はくもり、ところによりにわか雨。風は北西の風、後に北の風。23区西部では北西の風やや強く。

少女はなおも空を見上げる。

「天気予報は、はずれだな」

その星は尾を引き、不思議なことにその尾が消えることなく地表に向けて糸を引いて伸びていく。

「ほんとに流れ星？ 流れ星なら、すぐに軌跡は消えてなくなるはずなのに……」

母娘は首をかしげはじめた。

第四章 了（後書き）

四章が終了しました。

評価点を入れてくださるとありがたいです。

次章は、リリーナ姫再登場です。

第五章 リリーナ、東京の夜を歩く

流星の本体になる小天体は、0.1ミリ以下のごく小さな塵のようなものから、数センチ以上ある小石のようなものまで様々な大きさがある。こうした天体が地球の大気に秒速数十キロメートルという猛スピードで突入し、上層大気分子と衝突してプラズマ化したガスが発光する。これが地上から流星として観測される。

勘違いしやすいのは、星屑が大気との摩擦により燃焼してる状態が流れ星として見えていると思っっている人が多いこと。

「流れ星って言うより、もはや光の川ね」

ふつうの流れ星は地上より150キロから1000キロメートルの高さで光り始め、70キロメートルから50キロメートルの高さで消滅する。

特に大きい星は、燃え尽きずに隕石として地上に落下することもある。もっとも、見た目には燃え尽きたように見える流れ星も、その欠片は流星塵として地球に降り注いでいる。

ざわざわと騒ぎ出したのは、この親子だけではなかった。

近隣の家々の住人たちが、窓から外をのぞき、家から表に出て来た。

その時間、武蔵野市民いや日本中が全て空の一点を見つめていた。

「流れ星が地表に落ちていく……」

隣室から聞こえてくるほどに、近隣住民たちも一様にこの天体シヨーの話題でもちきりだった。

町の声は時間が経つとともに大きくなっていった。

日頃、言葉も交わさぬ隣人ともこれは何事かと顔を見合わせて話し合っている。

携帯電話を耳に当てる人間も多い。家族にかけているにせよ、友人にかけているにせよ、内容は容易に想像がつく。

「だ、大丈夫なの……？ 隕石や彗星だったら、大惨事よ」

のんきな母親も、それが自分の夫の勤務先の方角と気付いて、にわかにながさめ始めた。

「星が割れた」

流星の頭の部分が分かれ、光の川が3本に枝分かれした。

「お父さん、大丈夫かしら？」

みなが一斉に電話をするものだから、通信規制がかかっているようにアンテナが圏外になっている。

「無理もないわ。テレビをつけようよ。どこでもいいからニュース番組にして」

「ちょっと、待ってね……ってか、全部の局が臨時ニュースになっ

ているわ。当たり前ね」

液晶テレビの中では、予想通り報道特別番組が始まっており、アナウンサーが興奮を抑えるように努めて冷静に話していた。

『……また、気象庁や文部科学省にも事前に流星群などの観測情報は入っていないとのことですよ』

誰もが予期しない自然現象ということだった。

テレビの画面上部には緊急ニュースの知らせと、これが特別番組であることを示すテロップが流れている。

もはや、光の航跡は地表すれすれにまで到達しているように見える。彗星の落下ならば、どれだけの衝撃が地表にもたらされるだろう。幻想的な天体ショーが一転して、大惨事になることも考えられる。

しかし、少女はその光の緩やかな軌跡ゆえか、そのような禍々しいものの来訪にはどうしても思えず、ただただ素直にその美しき姿に見とれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0162w/>

異界嫁日記

2011年12月29日09時50分発行